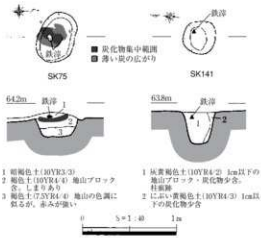
SK75（第105図、PL.33）

K29からL29グリッドに位置する。鍛冶工房群から北に約20m離れている。長軸55cm、短軸38cmの楕円形で、検出面からの深さは23cmである。

土坑中央付近の上面に炭化物が密にまとまっており、その上で鉄滓が出土している。

時期を示す遺物を伴っていないが、鍛冶に関する何らかの遺構と考え、奈良時代（８世紀後半）に位置づけておきたい。　（湯村）

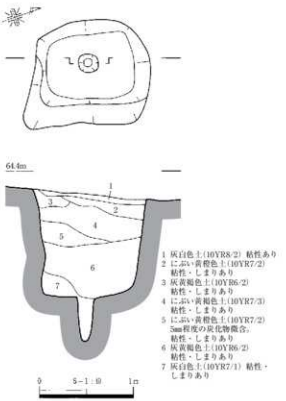


第105図　SK75・141

SK141（第105図）

SB3のP1から北に2m、K30グリッドに位置する。径、深さともに35cmを測る。埋土には炭化物が少量混じり、上層から鉄滓が出土している。

SK75同様、時期を示す遺物はないが、鍛冶に関する何らかの遺構と考え、奈良時代（８世紀後半）に位置づけておきたい。　（湯村）



第106図　SK79

第5節　時期不明の遺構

(1)土坑

SK78（第107図、PL.34）

E28からE29グリッド、標高63.2mの東尾根平坦部に位置し、西側3mにSK90が近接する。平面形は長軸2.33m、短軸1.98mの不整円形を呈する。検出面からの深さは最大2.25mを測る。断面形は擂鉢状を呈し、底面は径1.1mの円形となる。

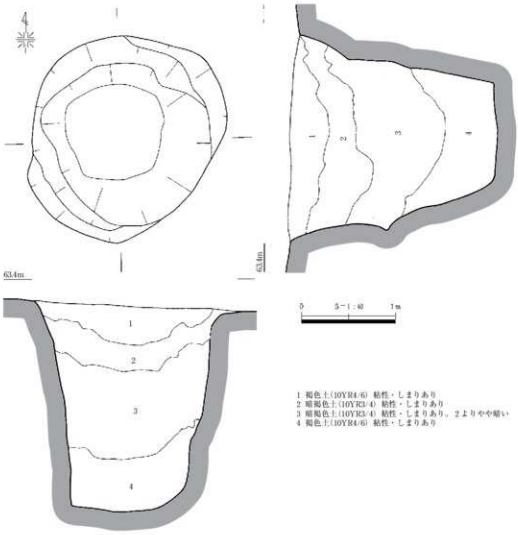
埋土は大きく４層に分けられ、褐色、暗褐色系の埋土からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

遺物は１層から土器小片が出土しているのみであり、本遺構の時期は不明である。遺構の形態的特徴から貯蔵穴と考えられる。　（大川）

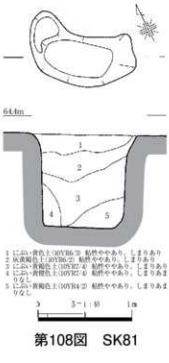
SK79（第106図、PL.34）

F31グリッド、標高64.2mの東尾根平坦部に位置する。

平面形は不整な方形で長軸1.2m、短軸1.1m、検出面から底面までの深さは1.1mを測り、ハードローム層を底面とする。底面中央にはピットが１基あり、その規模は径20cm、深さ50cmである。埋土は７層に分層でき、堆積は自然堆積による埋没と考えられる。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から



第107図　SK78



第108図　SK81

落とし穴と思われる。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。（岩垣）

SK81（第108図、PL.34）

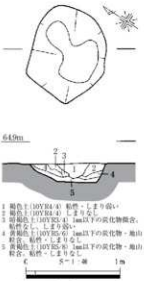
F30グリッド、標高64.2mの東尾根平坦部に位置し、東側4mにSK91が、西側3mにSK120が近接する。平面形は長軸1.18m、短軸54cmの不整楕円形を呈し、北西壁面に一部段を設ける。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは最大96cmを測る。底面は平坦である。

埋土は5層に分けられ、黄褐色系の埋土からなる。堆積はレンズ状となることから自然堆積と考えられる。形状や深さから当初は落とし穴と考えて調査していたが、底面に小ピットは認められず、また短軸側が狭いこともあり、落とし穴ではないと考えられる。遺物は出土しておらず、本遺構の時期、性格は不明である。（大川）

SK83（第109図、PL.34）

E32グリッド、標高64.7mの東尾根平坦部に位置し、西側5mにSK85等が近接する。平面形は長軸1.0m、短軸76cmの楕円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは最大22cmを測る。底面は平坦で不整楕円形を呈する。

埋土は５層に分けられ、レンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。遺物が出土しておらず、本遺構の時期、性格は不明である。（大川）



第109図　SK83

SK84（第110図、PL.34）

F32グリッド、標高65.2mの東尾根平坦部に位置し、東側4mにSK86、北側5mにSK94等が近接する。平面形は長軸1.04m、短軸66cmの不整楕円形を呈する。南東側壁面にはテラス状の段を設ける。断面形は浅い皿状となり、検出面からの深さは最大18cmを測る。

埋土は３層に分けられ、黒褐色、褐色系の埋土からなり、レンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。遺物は出土しておらず本遺構の時期、性格は不明である。（大川）

SK85（第111図、PL.34）

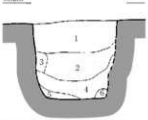
F32グリッド、標高65.0mの東尾根平坦部に位置し、北側1mにSK97、南側2mにSK86等が近接する。平面形は長軸98cm、短軸80cmの不整楕円形を呈する。北側の壁面にはテラス状の段を設ける。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは最大85cmを測る。埋土は６層に分けられ、レンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。本遺構は形態的には落とし穴の可能性もあるが、底面ピットを有さず、性格は不明である。また出土遺物が皆無なため、時期も不明である。（大川）

第110図　SK84

SK86（第112図、PL.35）

F32グリッド、標高65.2mの東尾根平坦部に位置する。

平面形は不整形な円形を呈し、長軸1.1m、短軸1.0m、検出面から底面までの深さは1.4mを測り、ハードローム層を底面とする。埋土は４層からなり、２層及び３層は壁面の崩落による堆積であろう。底面にピットは見られなかったが、遺構の規模や形状から落とし穴の可能性がある。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。（岩垣）



SK87（第113図、PL.35）

F32グリッド、標高65.1mの東尾根平坦部に位置し、北側2mにSK85、西側1.5mにSK86が近接する。平面形は長軸1.85m、短軸89cmの不整楕円形を呈する。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは最大17cmを測る。

第111図　SK85

底面は平坦で長軸87cm、短軸64cmを測る。

埋土は８層に分けられ、にぶい黄橙色土あるいは、黄褐色土を主体とする。埋土の特徴や堆積状況から自然堆積によって埋没したものと考えられる。遺物は出土しておらず、本遺構の時期、性格は不明である。

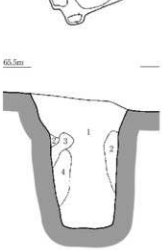
（大川）

SK88（第115図、PL.35）

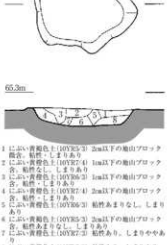
F31グリッド、標高64.8mの東尾根平坦部に位置する。

平面形は楕円形を呈し、長軸1.15m、短軸95cm、検出面から底面までの深さは95cmを測り、ハードローム層を底面とする。底面中央には、径15cm、深さ25cmのピットが１基ある。15層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から、落とし穴と思われる。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。

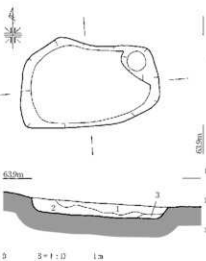
（岩垣）



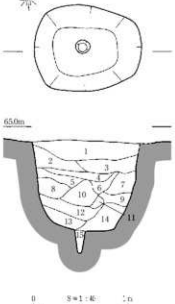
第112図　SK86



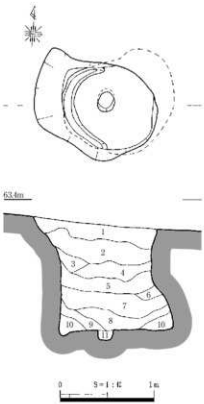
第113図　SK87



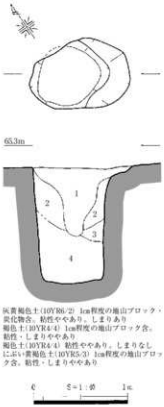
第114図　SK89



第115図　SK88



第116図　SK90



第117図　SK96

SK89（第114図、PL.35）

E29グリッド、標高63.7mの東尾根平坦部に位置し、北側6mにSK90、南側2mにSK91、SK141が近接する。平面形は長軸1.45m、短軸96cmの隅丸長方形を呈する。断面形は浅い逆台形で、検出面からの深さは最大15cmを測る。底面は平坦で北東隅には長軸45cm、短軸30cm、深さ34cmのピット状の掘り込みが認められた。

埋土は３層に分けられ、埋土の特徴や堆積状況から自然堆積によって埋没したものと考えられる。

遺物は出土しておらず、本遺構の時期、性格は不明である。（大川）

SK90（第116図、PL.35）

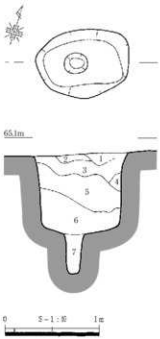
E29グリッド、標高63.2mの東尾根平坦部に位置する。

平面形は不整な円形を呈する。長軸1.3m、短軸1.0m、検出面から底面までの深さは1.2mを測る。ハードローム層を底面とし、底面東側は大きく外側に掘り込む袋状となる。底面中央には、径20cm、深さ10cmのピットが１基ある。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。11層からなる埋土を確認した。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。（岩垣）

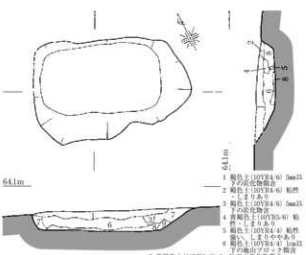
SK96（第117図、PL.35）

F32グリッド、標高65m付近の東尾根平坦部に位置する。

平面形は楕円形を呈する。長軸1.1m、短軸75cm、検出面から底面までの深さは1.2mを測り、ハードローム層を底面とする。４層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状から落とし穴の可能性が



第118図　SK97



第119図　SK98

ある。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。（岩垣）

SK97（第118図、PL.36）

F32グリッド、標高64.9mの東尾根平坦面に位置する。

平面形は隅丸方形を呈する。長軸1.0m、短軸75cm、検出面から底面までの深さは85cmを測り、ハードローム層を底面とする。底面中央には、径20cm、深さ40cmのピットが1基ある。7層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。（岩垣）

SK98（第119図、PL.36）

G29グリッド、標高63.9mの東尾根平坦部に位置し、北側3mに墳丘墓、東側1mにSK111が近接する。平面形は長軸1.67m、短軸1.06mの不整長方形を呈する。北西側の壁面は根の攪乱により失われている。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは最大24cmを測る。

埋土は9層に分けられ、自然堆積によるものと考えられる。検出面の上方から弥生土器体部片、軽石がまとまって出土しているが、直接本遺構に伴うものではない。埋土及び底面付近から遺物が出土しなかったため、本遺構の時期、性格は不明である。（大川）

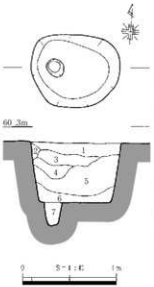
SK103（第120図、PL.36）

I20グリッド、西尾根北側の標高60.5m付近に位置する。SI27に切られ、本来の形態は不明である。残存規模は、長軸93cm、短軸77cm、深さ62cmである。遺物は出土していないが、底面に長軸20cm、短軸17cm、深さ25cmを測るピットを伴うことから、落とし穴と考える。（長尾）

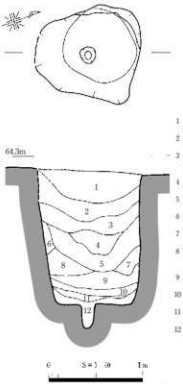
SK108（第121図、PL.36）

G30グリッド、標高64.2mの東尾根平坦面に位置する。

上面の平面形は歪な形を呈するが、底面は円形を呈する。上面では長軸1.1m、短軸1.0mを測る。



第120図　SK103



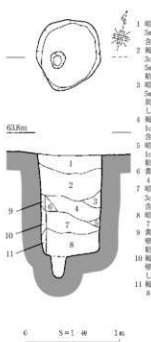
第121図　SK108

底面は長軸80cm、短軸70cmと底面に向けてすぼまる。検出面から底面までの深さは1.4mを測り、ハードローム層を底面とする。底面中央には、径15cm、深さ25cmのピットが1基ある。12層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。　（岩垣）

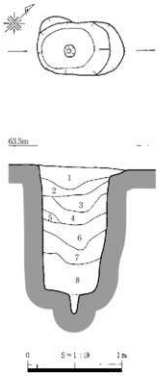
SK109（第122図、PL.36）

G29グリッド、標高64.6mの東尾根平坦面に位置する。

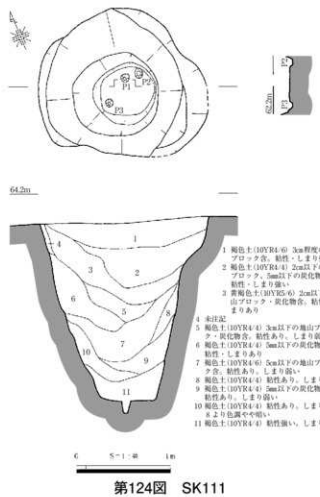
平面形は円形を呈する。長軸75cm、短軸70cm、検出面から底面までの深さは1.1mを測り、ハードローム層を底面とする。底面にはピットが1基ある。底面ピットは西側に寄っていて、径15cm、深さ25cmを測る。壁面が徐々に崩落しながらの自然堆積と考えられる11層の埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。　（岩垣）



第122図　SK109



第123図　SK110



第124図　SK111

SK110（第123図、PL.36）

G28グリッド、標高63.3mの東尾根平坦部に位置する。

平面形は楕円形を呈する。長軸95cm、短軸75cm、検出面から底面までの深さは1.3mを測り、ハードローム層を底面とする。底面中央には、径15cm、深さ20cmのピットが1基ある。8層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。（岩垣）

SK111（第124図、PL.37）

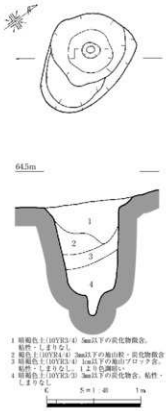
F29からG29グリッド、標高63.9mの東尾根平坦部に位置する。

平面形は不整な円形を呈し、底面に向かいすぼまるすり鉢状の掘り込みとなる。長軸1.9m、短軸1.5m、検出面から底面までの深さは1.9mを測る。底面には径15cm、深さ10cm程度のピットが3基ある。11層からなる埋土を確認した。底面ピットの存在から大型の落とし穴と考えられる。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。（岩垣）

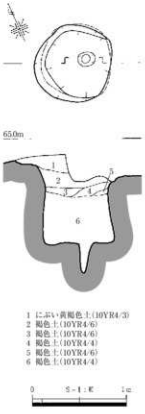
SK112（第125図、PL.37）

H31グリッド、標高64.2mの東尾根平坦部に位置する。

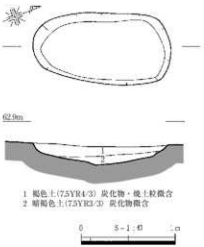
平面形は円形を呈する。長軸1.0m、短軸80cm、検出面から底面までの深さは1.0mを測り、ハードローム層を底面とする。底面西よりには、径20cm、深さ25cmのピットが1基ある。4層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。（岩垣）



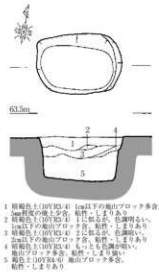
第125図　SK112



第126図　SK113



第127図　SK114



第128図　SK117

SK113（第126図、PL.37）

H31グリッド、標高64.8mの東尾根平坦部に位置し、SK122に切られる。

平面形は円形を呈する。長軸80cm、短軸75cm、検出面から底面までの深さは1.0mを測り、ハードローム層を底面とする。断面形はやや底面が広がるフラスコ状を呈する。底面には、径15cm、深さ30cmのピットが１基ある。６層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。SK122との切り合い関係から弥生時代中期後葉以前の遺構と考えられるが、遺物が出土していないため、時期は不明である。（岩垣）

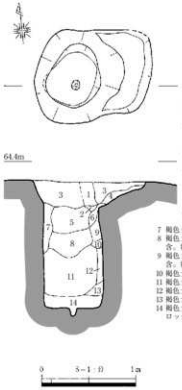
SK114（第127図、PL.37）

J26グリッド、標高62.7mの西尾根平坦部に位置し、北側5mにSI18、南東側7mにSI36が近接する。平面形は長軸1.47m、短軸76cmの長楕円形を呈する。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは最大19cmを測る。底面は中央部がややくぼむ。

埋土は２層に分けられた。時期を特定できる遺物が出土していないため、本遺構の時期、性格は不明である。（大川）

SK117（第128図、PL.37）

E28グリッド、標高63.2mの東尾根平坦部に位置し、南側2mにSK116、南東4mにSK90が近接する。



第129図　SK120

平面形は長軸91cm、短軸64cmの隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形で、検出面からの深さは最大45cmを測る。平面規模は小型であるが、深さは深く、しっかりした掘り込みである印象を受ける。

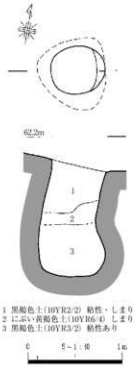
埋土は５層に分けられた。３層以下の埋土は地山のハードロームブロック等を密に含み、しまりが良いことから人為的に埋め戻された可能性もある。遺物が出土しておらず、本遺構の時期、性格は不明である。　（大川）

SK120（第129図、PL.37）

F30グリッド、標高64.2mの東尾根平坦部に位置する。

上面の平面形は長軸1.2m、短軸90cmの隅丸方形を呈し、底面は長軸55cm、短軸40cmの歪な円形を呈する。検出面から底面までの深さは1.2mを測り、ハードローム層を底面とする。底面中央には、径15cm、深さ10cm程度のピットが１基ある。壁面が徐々に崩落しながら堆積したと考えられる14層の埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。

（岩垣）

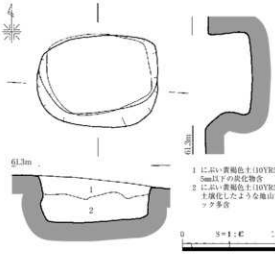


第130図　SK124

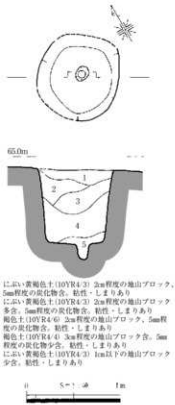
SK124（第130図、PL.38）

D28グリッド、東尾根東側斜面の標高62m付近に位置し、西側9mにSK78が近接する。平面形は径58cmの不整円形を呈する。断面形は東側が掘り方中位付近から底面にかけて緩やかに広がる歪な袋状となり、検出面からの深さは最大1.25mを測る。底面は径73cmの不整円形を呈し、やや丸みをおびる。

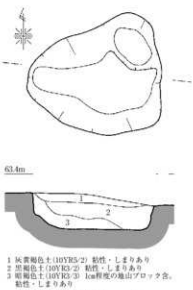
埋土は３層に分けられ、黒褐色土、にぶい黄褐色土からなる。形態的特徴からすれば本遺構は貯蔵穴と想定される。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。　（大川）



第131図　SK125



第132図　SK128



第133図　SK129

SK125（第131図、PL.38）

I26グリッド、SI35とSI37の中間付近の、標高61m前後の谷を臨む斜面に位置する。上面は長軸1.3m、短軸95cmの楕円形であり、底に向かって南壁は一旦すぼまった後、袋状に広がる形態となる。底面規模は長軸1.07m、短軸85cmを測る。深さは最大で50cmであった。

顕著な袋状土坑ではないが、貯蔵穴であると思われる。遺物は出土していない。（湯村）

SK128（第132図、PL.38）

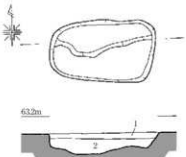
H31グリッド、標高64.9mの東尾根平坦部に位置し、SK122に切られる。

平面形は円形を呈する。長軸90cm、短軸80cm、検出面から底面までの深さは80cmを測り、ハードローム層を底面とする。底面には、径15cm、深さ30cmのピットが1基ある。5層からなる堆積を確認した。SK122との切り合い関係から弥生時代中期後葉以前の遺構と考えられるが、遺物が出土していないため、時期は不明である。（岩垣）

SK129（第133図、PL.38）

J29グリッド、標高63.2mの谷頭に近い平坦面に位置し、東側7mにSK130、127が近接する。平面形は長軸1.42m、短軸1.32mの不整楕円形を呈する。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは最大40cmを測る。底面は不整形で、北側が一段低く掘りくぼめられている。

埋土は3層に分けられる。比較的高所に当たる西側から傾斜しながら堆積しており、自然堆積によ



第134図　SK130

るものと考えられる。遺物が出土しておらず、本遺構の時期・性格等は不明である。（大川）

SK130（第134図、PL.38）

I29グリッド、標高63mの谷頭に近い平坦面に位置し、西側7mにSK129、南側1mにSK127が近接する。平面形は長軸1.12m、短軸64cmの隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形で、検出面からの深さは最大23cmを測る。底面の北半部は一段低くなる。

埋土は２層に分けられ、自然堆積によるものと考えられる。遺物が出土しておらず、遺構の時期・性格等は不明である。（大川）

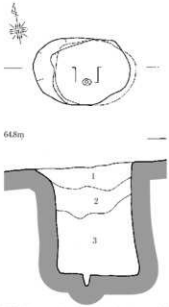
SK131（第135図、PL.38）

H31グリッド、標高64.6mの東尾根平坦部に位置する。

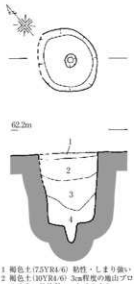
平面形は円形を呈する。長軸1.1m、短軸70cm、検出面から底面までの深さは1.2mを測り、ハードローム層を底面とする。底面には、径10cm、深さ15cmのピットが１基ある。３層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。遺物が出土していないため、 本遺構の時期は不明である。（岩垣）

SK132（第136図、PL.39）

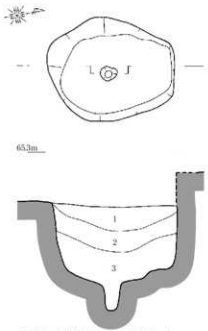
F27グリッドに位置し、SI26に切られる。SI26床面を精査中、地山ブロックを多く含む径70cmの褐



第135図　SK131

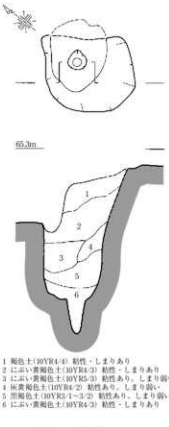


第136図　SK132



第137図　SK133

色土の広がりを確認したため、最初は主柱穴として調査を行っていた。西側半分を掘り下げた際、底面にピットを確認したため、SI26に切られる落とし穴と判断して調査した。検出面での標高は62.0mである。平面形は円形を呈する。長軸70cm、短軸60cm、検出面から底面までの深さは75cmを測り、ハードローム層を底面とする。底面中央には、径15cm、深さ20cmのピットが1基ある。4層からなる埋土を確認した。1層は、SI26の床面であるハードローム層が二次的な堆積をしたものと思われる。本遺構は、SI26との切り合い関係から、弥生時代中期後葉(Ⅳ－2からⅣ－3)以前に位置づけられるが、時期は不明である。（岩垣）



1 褐色土(10YR4/4) 粘性・しまりあり
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性・しまりあり
3 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘性あり、しまり弱い
4 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性あり、しまり弱い
5 黒褐色土(10YR3/1～3/2) 粘性あり、しまり弱い
6 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性・しまりあり

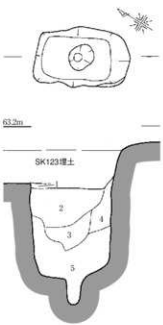
0　5=1:40　2m

第138図　SK135

SK133（第137図、PL.39）

H32グリッドに位置し、SK100に切られている。

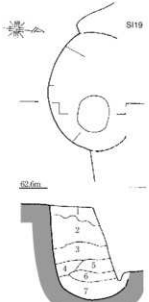
SK100の底面を精査中、地山ブロックを含む長軸1.4m、短軸1.1m程度の褐色土の広がりを確認したため、土坑として調査した。平面形は歪な楕円形を呈する。長軸1.35m、短軸1.1m、検出面から底面までの深さは85cmを測り、脆い礫層を底面とする。底面中央には、径20cm、深さ30cmのピットが1基ある。3層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし



1 褐色土(10YR4/6) SK123の陥床
2 褐色土(10YR4/6) 粘性強い、しまりあり
3 褐色土(10YR4/6) 3cm以下の地山ブロック含、粘性強い、しまりややあり
4 褐色土(10YR4/6) 3cm以下の地山ブロック含、粘性・しまりあり
5 褐色土(10YR4/6) 粘性・しまりあり

0　5=1:40　1m

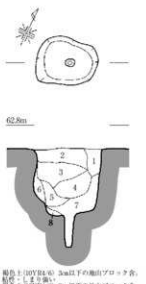
第140図　SK134



1 黒褐色土(7.5YR3/1)
2 暗褐色土(7.5YR3/4) 2cm程度の地山ブロック含
3 暗褐色土(7.5YR3/3) 2mm程度の炭化物含
4 黒褐色土(7.5YR2/2)
5 暗褐色土(7.5YR3/4)
6 暗褐色土(7.5YR3/4) 5に比べ色調明い、2cm程度の地山ブロック含
7 黒褐色土(7.5YR2/2) 2cm程度の地山ブロック含

0　5=1:40　1m

第141図　SK138



1 褐色土(10YR4/6) 3cm以下の地山ブロック含、粘性・しまりあり
2 褐色土(10YR4/6) 3cm以下の地山ブロック含、粘性・しまり強い
3 褐色土(10YR4/6) 2cm以下の地山ブロック含、粘性・しまり強い
4 褐色土(10YR4/6) 3cm以下の地山ブロック含、粘性・しまりあり
5 褐色土(10YR4/6) 粘性・しまりあり
6 褐色土(10YR4/6) 1cm以下の地山ブロック多含、粘性あり、しまりややあり
7 黒褐色土(10YR3/6) 3cm以下の地山ブロック含、粘性・しまりあり
8 褐色土(10YR4/6) 粘性あり、しまりややあり

0　5=1:40　1m

第139図　SK136

穴と思われる。本遺構はSK100との切り合い関係から、弥生時代中期後葉以前と考えられるが、時期は不明である。（岩垣）

SK134（第140図、PL.39）

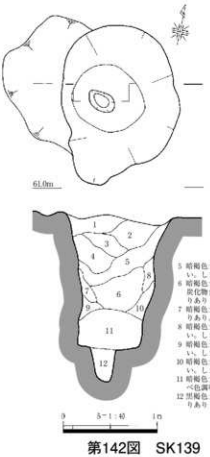
G28グリッド、墳丘墓西側に近接した標高63mの斜面に位置し、SK123に切られる。

SK123の埋土を掘り下げ中に本遺構の存在を確認した。平面形は隅丸形を呈する。長軸1.0m、短軸65cm、検出面から底面までの深さ1.3mを測り、ハードローム層を底面とする。底面中央には、径25cm、深さ30cmのピットが１基ある。５層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。本遺構の時期はSK123との切り合い関係から、弥生時代中期後葉以前の遺構であると考えられる。（岩垣）

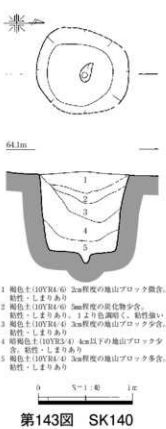
SK135（第138図、PL.39）

H32グリッド、標高65mの東尾根平坦部に位置する。遺構の西側はSK121に切られる。

SK121の調査中、壁面に褐色土を埋土とする落ち込みを確認したものである。平面形は歪な方形状を呈し、長軸1.1m、短軸80cm、検出面から底面までの深さは1.4mを測り、ハードローム層を底面とする。底面中央には、径20cm、深さ40cmのピットが１基ある。６層からなる埋土を確認した。本遺構はSK121との切り合い関係から、弥生時代中期後葉以前の遺構であると考えられるが、時期は不明である。（岩垣）



第142図　SK139



第143図　SK140

SK136（第139図、PL.39）

G28グリッドに位置し、SK123に切られる。

SK123の床面を精査中、床面とは異なる地山ブロックを含む褐色土の広がりを確認したため、土坑として調査した。平面形は歪な楕円形を呈する。長軸65cm、短軸50cm、検出面から底面までの深さは70cmを測り、ハードローム層を底面とする。底面中央には、径10cm、深さ35cmのピットが1基ある。8層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。本遺構はSK123との切り合い関係から、弥生時代中期後葉以前の遺構であると考えられるが、時期は不明である。（岩垣）

SK138（第141図、PL.39）

I28グリッド、西尾根から谷に向かう斜面の標高62.5m付近に位置する。SI19に切られ、本来の平面形は不明であるが、推定される規模は長軸1.25m、短軸80cm、検出面からの深さは1.0mである。遺物は出土しておらず、遺構の性格は不明である。（長尾）

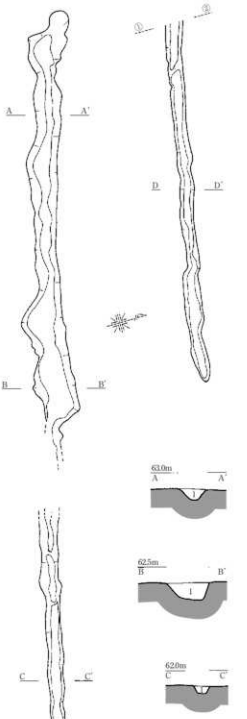
SK139（第142図、PL.40）

H26からI26グリッド、西尾根から谷に向かう斜面の標高61m付近に位置する。長軸1.65m、短軸1.25mの歪な円形で、検出面からの深さは1.45mである。遺物は出土していないが、底面に長軸30cm、短軸20cm、深さ35cmのピットを伴うことから、落とし穴と考える。（長尾）

SK140（第143図、PL.40）

E30グリッド、標高63.9mの東尾根平坦部に位置し、西側をSK91に切られる。

平面形は円形を呈する。長軸1.0m、短軸90cm、検出面から底面までの深さは90cmを測り、ハードロームを底面とする。底面中央には、歪な形をした深さ10cmのピットが1基ある。5層からなる埋土を確認した。遺構の規模、形状や底面ピットの存在から落とし穴と思われる。本遺構の時期はSK91との切り合い関係から、弥生時代中期後葉以前の遺構であると考えられるが、時期は不明である。（岩垣）



第144図　SD1

(2)溝

SD1（第144図）

G28からJ27グリッドにかけて、谷を横断する溝であり、SI19、SS11を切る。延長32.5m、最大幅1.1mを測り、断面形はU字形を呈し、検出面からの深さは最大25cmを測る。溝底面のレベルは東端で62.47m、西端で62.75m、中央部で61.59mである。

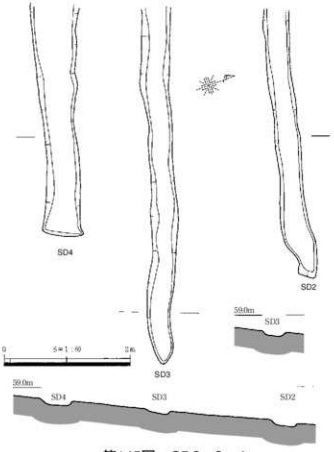
埋土は黒褐色土で基本層序11層にあたるホーキ層のブロックを多く含んでいた。埋土中から弥生土器片等が出土しているが、遺構の時期を示すものではない。古墳時代中期の住居SI19を切ることから、本遺構は古墳時代中期以降のものと想定されるが、明確な時期は不明である。谷の北側にはSD1と同じ方向に並列するSD2～4を認めるが、これらとの関連性も不明である。（大川）

SD2・3・4（第145図）

G24グリッド、谷の底にあたる部分に位置する。谷に堆積している遺物包含層の最上層である黒褐色土を除去し、褐灰色土上面を精査した段階で、谷に直交して並列する３条の溝を検出した。

SD2は北側の溝である。検出長4.3m、幅40cm、深さ6cm程度を測る。SD3は中央の溝で、検出長5.7m、幅45cm、深さ7cm程度、SD4は検出長3.7m、幅50～80cm、深さ10cm程度である。

遺物を伴っていないので時期は不明だが、褐灰色土は弥生時代の遺物包含層で、黒褐色土には古墳時代以降の遺物を含むので、古墳時代より新しいと思われる。SD4の約35m南には同じ方向に延びるSD1がある。SD1は古墳時代中期のSI19を切っているので、この３本の溝がSD1と関連するものであれば古墳時代中期以降のものであるかもしれない。（湯村）



第145図　SD2・3・4

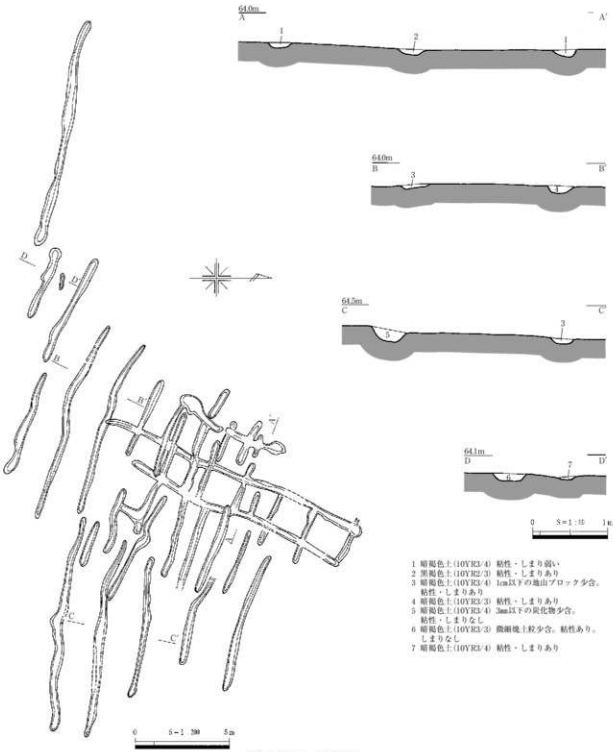
(3)ピット

調査区内に単発的に存在するピットを35基検出した。詳細は表16を参照されたい。（湯村・岩垣）

(4)耕作痕(第146図)

調査区南側の浅い谷部を中心に、基本層序８層褐灰色土上面で検出された。遺構は東西40m、南北15mの範囲にわたっており、幅40cm、深さ最大10cm程の溝が格子状に重なっている。

畝状の高まりを確認することはできなかったが、溝全体の形状や広範囲に及ぶことなどから、畑の耕作痕である可能性がある。８層の上に堆積する２層褐色土は、弥生時代から奈良時代までの遺物を含んでいるが、本遺構の時期については不明である。　(湯村)



第146図　耕作痕

第6節　遺構外出土遺物(第147・148図、PL.62～68)

ここでは主に谷部から出土した遺物について報告する。出土したすべての時期や形式を網羅しているわけではなく、谷部に堆積する複数の遺物包含層の細かな時期差等も表していないことをお断りしておく。

244から250までは土器を掲げた。244から247は甕である。244はあまり拡張されない口縁端部に2条の凹線文を施す。245、246の口縁端部は上下に拡張されているが、施される凹線文は2条である。247は頸部に貼付突帯を巡らせる。口縁端部の凹線文は多条化している。248は壺または高坏等の脚部。凹線文により区画された筒部外面は、貫通しない三角形透かしと矢羽根状の文様で飾られる。外面に赤彩を施す。249は長い頸部をもつ壺で、口縁部外面には2条の突帯を巡らせる。当地域では見かけない器形で、胎土も異なる。外面と口縁部内面に赤彩が認められる。250はコップ形の土器。外面は粗いハケ調整であるが、作りは丁寧である。

J21、J22はガラス小玉である。ガラス小玉が出土したSI17、18の南側にあたる西尾根平坦部から出土した。

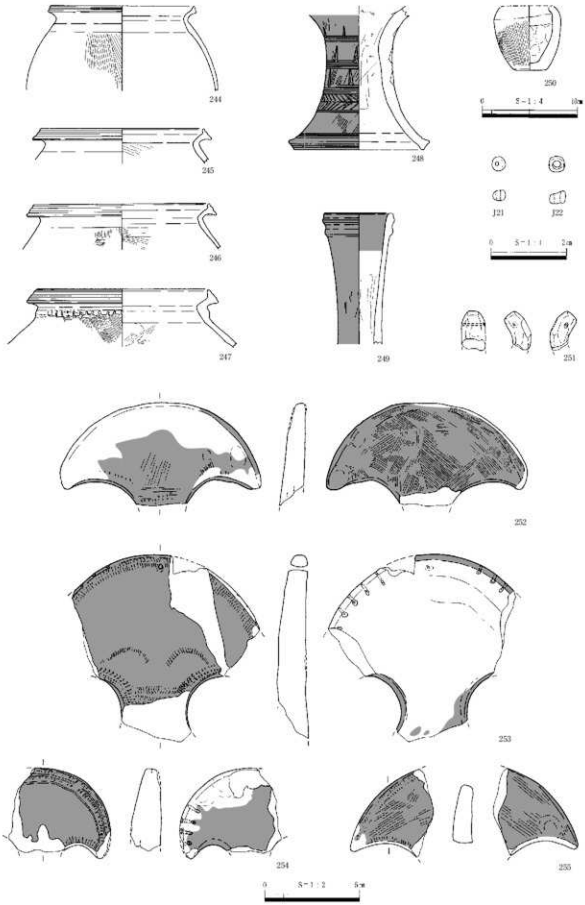
251は土製勾玉で、下半を欠失する。穿孔は焼成前に行われ、径が細く一定しており、粘土のはみ出しがないように仕上げられている。墳丘墓西側の谷部から出土した。

252～255は分銅形土製品。いずれも表裏両面が赤彩され、刺突文などで飾られる。すべて欠損している。252は墳丘墓南西の斜面部から、255はその少し西側の斜面部から出土した。253はSI35の北側、254はSI37東側の、それぞれ谷部からの出土。梅田萱峯遺跡では、これまでの調査で出土したものを含め9点の分銅形土製品が見つかったことになる。56点もの分銅形土製品が出土した鳥取市青谷上寺地遺跡を別として、県内では1遺跡からの出土点数としては多いといえよう。Ⅳ－1期の集落域である1区と2区では出土しておらず、Ⅳ－2期からⅣ－3期の集落域の3区と4区にのみ認められること、そのなかでも墳丘墓周辺の住居や方形土坑、あるいは遺物包含層から出土していることは、従来その機能が明確でなかった分銅形土製品が、墳墓祭祀に伴い使用される場合があったことを示唆するものとしてきわめて興味深いといえる。

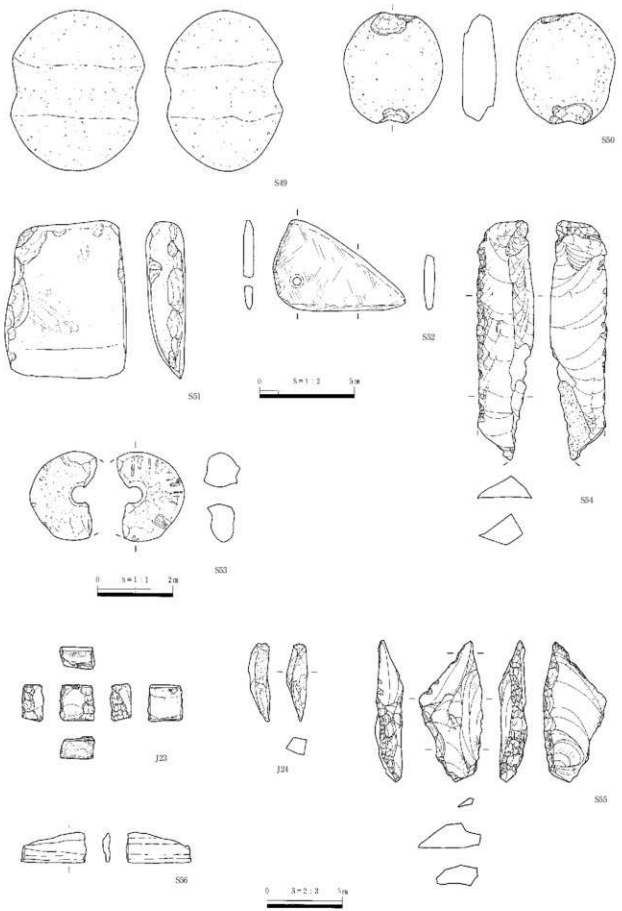
S49、S50は石錘。S49は瀬戸内型で、器体中央を幅広の溝が巡る。S50は扁平な円礫の上下両端を打ち欠いたもの。S51は扁平片刃石斧である。平面形態は整った方形になっておらず整形時の剥離面を残している。

S52は石庖丁で、全体形状の不整形さや穿孔部位の位置などからして、刃部再生により当初の器形をとどめていないものだろう。S54は黒曜石製の縦長剥片。左側縁には使用痕とおぼしき小剥離が連続する。S55はナイフ形石器。二側縁を加工して切り出し形に仕上げている。ブランティングは左側縁が腹面側から、右側縁は背面側からのものに加え基部には腹面側からも施されている。素材剥片の打点は右側縁基部で、背面の剥離面構成ともあわせ、素材剥片は幅広の寸詰まりなものであったことを示している。刃部には微細な剥離痕が認められる。黒曜石を用いている。S53は欠損しているが、黒色で緻密な石材を小型円盤状に加工し、中央に両面から穿孔を施す。表面には放射状の擦痕が残されている。用途は不明だが、装飾品の類か。

J23、J24は緑色凝灰岩製の管玉素材。S56は石鋸である。　(湯村)



第147図　遺構外出土遺物(1)



第148図　遺構外出土遺物(2)

表1　土器観察表（1）

遺物No.	遺構層位	器種	器形	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
1	S114 上層	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口12.6 △5.3	口縁部～胴部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ハケ	密	内外面　浅黄橙色～黄橙色	良好	
2	S114 上層	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口14.0 △5.1	口縁部～胴部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ハケ	密	外面　にぶい褐色～黒褐色 内面　黄橙色	良好	
3	S114 上層	弥生土器 壺か高坏	胴部	— △3.4	胴部	外面　10条の沼線残存 内面　ケズリ	密	内外面　浅黄橙色～黄橙色	良好	
4	S86 底面付近	弥生土器 甕	口縁部～体部下半	口13.0 △13.5	口縁部～体部下半	外面　口縁部2条の沼線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ハケ	密	内外面　浅黄橙色	不良	外面煤付着
5	S86 底面付近	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口20.6 △4.9	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の沼線,胴部縦付突帯,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ハケ	やや粗	内外面　浅黄橙色～黄橙色	良好	
7	S115 1層	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口12.7 △2.2	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の平行沈線,胴部ナデ 内面　口縁部ナデ,胴部ケズリ	やや粗	内外面　にぶい黄橙色	良好	外面煤付着
8	S115 1層	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口15.0 △3.5	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の平行沈線,胴部ナデ 内面　口縁部ナデ,胴部ケズリ	やや粗	外面　にぶい褐色 内面　浅黄橙色	良好	口縁部内面赤彩,外面煤付着
9	S115 2～3層	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口20.0 △6.8	口縁部～胴部	外面　ナデ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	やや粗	内外面　黄橙色	やや不良	外面煤付着
10	S117 埋土中	弥生土器 ミニチュア土器	口縁部～底部	2.6 3.5	口縁部～底部	外面　口縁部直下に刺突文,体部ナデ 内面　ナデ	密	内外面　褐灰色	良好	
11	S117 埋土中	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口12.0 △3.1	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　橙色 内面　黄橙色	良好	
12	S117 埋土中	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口16.0 △3.7	口縁部～胴部	外面　口縁部2条の沼線,体部不明 内面　口縁部ナデ,胴部ケズリ	密	外面　明黄褐色 内面　黄橙色	良好	外面煤付着
13	S117 埋土中	弥生土器 甕	口縁部～胴部上半	口12.6 △5.3	口縁部～胴部上半	外面　口縁部2条の沼線,体部不明 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　明黄褐色 内面　橙色	良好	外面煤付着
14	S117 埋土中	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口17.6 △3.7	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線,体部不明 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　にぶい褐色 内面　黄橙色	良好	外面煤付着
15	S117 埋土中	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口12.0 △3.0	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の沼線,胴部ナデ 内面　口縁部ナデ,胴部ケズリヲ	密	外面　にぶい橙色・灰褐色 内面　橙色	良好	
16	S117 埋土下層	弥生土器 甕	口縁部	口20.4 △2.3	口縁部	外面　3条の沼線 内面　ナデ	密	外面　黄橙色 内面　明黄褐色	良好	
17	S117 埋土中	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口14.2 △3.5	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線,胴部不明 内面　口縁部ナデ,胴部不明	密	内外面　明黄褐色	良好	
18	S117 埋土中	弥生土器 甕か	口縁部～胴部	口12.9 △1.7	口縁部～胴部	外面　口縁部1条の沼線,胴部ナデ 内面　口縁部ナデ,胴部ケズリ	密	内外面　明黄褐色	良好	
19	S117 埋土中	弥生土器 壺	体部	— △2.7	体部	外面　ナデ 内面　ナデ	密	外面　にぶい赤褐色 内面　灰黄褐色	良好	外面赤彩
21	S118 埋土中	弥生土器 壺	口縁部～胴部	口13.6 △2.9	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の沼線,胴部ナデ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　赤褐色・褐灰色 内面　赤褐色	良好	外面及び口縁部内面赤彩
22	S118 埋土中	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口22.6 △3.9	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線,胴部ナデ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　明黄褐色 内面　にぶい黄橙色	良好	
23	S118 2層	弥生土器 甕	口縁部～体部上半	口22.2 △7.2	口縁部～体部上半	外面　口縁部2条の沼線,体部不明 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　にぶい黄橙色 内面　黄橙色	良好	外面煤付着
24	S118 埋土中	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口12.4 △4.1	口縁部～胴部	外面　ナデ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　にぶい黄褐色 内面　黒褐色	良好	
25	S118 埋土中	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口17.0 △4.4	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の沼線,体部不明 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　にぶい褐色 内面　にぶい橙色・褐灰色	良好	
26	S118 2層	弥生土器 甕	口縁部～胴部	口14.6 △5.7	口縁部～胴部	外面　口縁部2条の沼線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　褐灰色 内面　黒褐色	良好	
27	S118 2層	弥生土器 コップ形土器	口縁部～底部	4.8 5.5	口縁部～底部	内面　ケズリ後ナデ 外面　ケズリ後ナデ	密	外面　明黄褐色・褐灰色 内面　黒褐色	良好	
28	S120 埋土中	弥生土器 甕	口縁部～体部上半	16.0 △12.8	口縁部～体部上半	外面　口縁部2条の沼線,体部ハケ後くずル 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	普通	外面　黄橙色・灰黄褐色 内面　明黄褐色	普通	外面煤付着
29	S120 床面	弥生土器 甕	口縁部～体部上半	16.5 △14.7	口縁部～体部上半	外面　口縁部4条の平行沈線,体部ナデ,胴部刺突文 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	普通	外面　淡黄色・橙色 内面　淡黄色	普通	外面赤彩

表2　土器観察表（2）

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm)器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調		種成	備考
30	S120 埋土中	弥生土器 壺	⌀11.6 △2.3	口縁部	外面　5条の平行沈線 内面　ナデ	やや密	内外面　橙色		やや良好	内面赤彩
31	S120 床面	弥生土器 甕	18.3 △4.6	口縁部～頸部	外面　口縁部2条の平行沈線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	普通	外面　淡黄色・黒褐色・橙色 内面　浅黄色・灰黄色・黒褐色		やや良好	外面煤付着
32	S121 20層	弥生土器 甕	⌀12.7 △3.0	口縁部～頸部	外面　口縁部3条の沼線、頸部ナデ 内面　口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	外面　橙色 内面　浅黄橙色		良好	
33	S121 35層	弥生土器 甕	⌀13.3 △3.4	口縁部～頸部	外面　口縁部4条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	外面　にぶい黄橙色 内面　浅黄橙色		良好	
34	S121 18層	弥生土器 甕	⌀16.2 △4.4	口縁部～胴部	外面　口縁部2条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ナデ	密	外面　赤橙色 内面　橙色		良好	
35	S121 7層	弥生土器 甕	⌀19.5 △4.8	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	内外面　浅黄橙色		良好	
36	S127 57～58層	弥生土器 甕	⌀18.0 △11.8	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、頸部以下ハケ	やや粗	外面　褐灰色 内面　にぶい褐色		やや不良	外面煤付着
37	S127 58層	弥生土器 甕	⌀16.0 △2.4	口縁部～頸部	外面　口縁部2条の沼線、頸部不明 内面　口縁部ナデ、頸部ナデ	密	内外面　浅黄橙色		良好	
38	S127 床面付近	弥生土器 甕	⌀15.2 △5.0	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、頸部以下ナデケ	やや粗	内外面　にぶい橙色～黒褐色		良好	
39	S127 57層	弥生土器 甕	⌀16.9 △6.9	口縁部～胴部	外面　口縁部2条の沼線、体部不明 内面　口縁部ナデ、頸部以下ナデケ	密	内外面　にぶい黄橙色		良好	
40	S122 5層	弥生土器 広口壺	⌀19.0 △2.9	口縁部	外面　3条の沼線 内面　ナデ	密	内外面　浅黄橙色		良好	
41	S122 5・12層	弥生土器 広口壺	⌀20.6 △4.9	口縁部～頸部	外面　口縁部2条の沼線後キザミ、頸部ハケ 内面　口縁部ハケ、頸部ハケ	密	外面　橙色 内面　黄橙色		良好	
42	S122 2層	弥生土器 甕	⌀18.6 △3.4	口縁部～頸部	外面　口縁部3条の沼線、頸部貼付突帯 内面　口縁部ナデ、体部不明	密	内外面　浅黄橙色		良好	
43	S122 8層	弥生土器 甕	⌀16.8 △3.9	口縁部～胴部	外面　口縁部2条の沼線、頸部貼付突帯、胴部ナデ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	外面　黄橙色 内面　明黄褐色・灰黄褐色		良好	
44	S122 5層	弥生土器 甕	⌀20.0 △5.0	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線、頸部貼付突帯、胴部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	外面　橙色 内面　黄橙色・黒褐色土		良好	
45	S122 5層	弥生土器 甕	⌀14.4 △2.7	口縁部～頸部	外面　口縁部3条の沼線、頸部ナデ 内面　口縁部ナデ、頸部ナデ	密	内外面　橙色		良好	
46	S123 1層	弥生土器 甕	⌀20.0 △3.6	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の沼線、頸部貼付突帯、胴部不明 内面　口縁部ナデ、体部不明	密	内外面　黄橙色		良好	
47	S123 2層	弥生土器 甕	⌀12.6 △3.3	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線、胴部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	外面　明黄褐色 内面　褐灰色		良好	
48	S123 床面付近	弥生土器 甕	⌀18.0 △5.7	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線、胴部不明 内面　口縁部ナデ、体部不明	密	内外面　黄橙色		良好	
49	S123 2～3層	弥生土器 甕	⌀14.4 △5.5	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線、胴部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	外面　橙色 内面　褐色		良好	
50	S123 床面(壁際)	弥生土器 甕	⌀16.0 △4.4	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の沼線、胴部不明 内面　口縁部ナデ、体部不明	密	外面　橙色 内面　黄橙色		良好	外面煤付着
51	S125 2層	弥生土器 広口壺	⌀21.2 △2.0	口縁部	外面　4条の沼線 内面　4条の沼線	やや密	内外面　明黄橙色・橙色		やや良好	
52	S125 3層	弥生土器 長頸壺	⌀11.3 △6.8	口縁部～頸部	外面　口縁部3条の沼線、頸部ハケ後沼線 内面　口縁部ナデ、頸部シボリ後ナデ	やや密	内外面　にぶい橙色		やや良好	外面赤彩
53	S125 壺盤(床面)	弥生土器 壺	⌀7.9 12.9	口縁部～底部	外面　口縁部3条の沼線、胴部刺突文、体部ハケ後ミガキ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ、下半ケズリ	普通	外面　浅黄橙色・明黄褐色・にぶい黄褐色 内面　浅黄橙色・橙色		普通	
54	S125 P5-埋土中	弥生土器 甕	⌀16.3 △5.3	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	普通	外面　にぶい黄橙色・褐灰色・橙色 内面　にぶい黄橙色・橙色・褐灰色		普通	
55	S125 床面	弥生土器 甕	⌀16.2 △8.3	口縁部～体部上半	外面　口縁部2条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部下半ケズリ	やや粗	外面　橙色・明黄褐色・褐灰色 内面　浅黄褐色・橙色・褐灰色		やや不良	
56	S125 壺盤～床面	弥生土器 甕	⌀14.6 △13.2	口縁部～体部上半	外面　口縁部4条の沼線、体部ハケ後ミガキ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ、下半ケズリ	普通	内外面　橙色・浅黄橙色・灰黄褐色・黒色		普通	外面煤付着

表3　土器観察表（3）

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm)器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
57	S125 壁際～床面	弥生土器 甕	口13.0 △19.3	口縁部～体部下半	外面　口縁部3条の沼線、刷毛刺突文、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ、下半ケズリ	普通	外面　にぶい黄橙色・灰黄褐色・褐灰色 内面　にぶい黄橙色	普通	外面煤付着
58	S126 2層	弥生土器 壺	口11.9 △3.1	口縁部～肩部	外面　口縁部2条の沼線後ヤザミ、刷毛平行及び波状沈線 内面　口縁部ナデ、体部ケズリ	密	外面　にぶい黄橙色 内面　浅黄色	良好	外面赤彩
59	S126 2層	弥生土器 高杯ヵ	— △7.6	脚筒部	外面　ハケ後14条以上の沼線 内面　ケズリ	密	内外面　灰白色	良好	外面赤彩
60	S126 3層	弥生土器 甕	11.4 3.5	口縁部～つまみ	外面　ハケ後平行及び波状の沈線 内面　ハケ後ナデ	密	外面　にぶい黄橙色 内面　浅黄色	良好	外面赤彩
61	S126 2層	弥生土器 甕	口22.9 △4.0	口縁部～頸部	外面　口縁部4条の沼線、頸部貼付突帯 内面　口縁部ナデ、頸部ハケ	密	内外面　淡黄色	良好	
62	S126 3層	弥生土器 甕	口17.9 △5.7	口縁部～肩部	外面　口縁部4条の沼線、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	内外面　淡黄色	良好	
63	S126 2層	弥生土器 甕	口18.8 △5.0	口縁部～肩部	外面　口縁部2条の沼線、体部不明 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	外面　浅黄橙色 内面　灰色	良好	
64	S126 床面	弥生土器 甕	口15.9 △2.4	口縁部	外面　4条の沼線後ヤザミ 内面　ナデ	密	内外面　浅黄色	良好	外面煤付着
65	S126 P7(9層)	弥生土器 甕	口15.1 △15.2	口縁部～体部下半	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部上半ナデ、下半ケズリ	密	外面　橙色 内面　浅黄橙色・黒褐色	良好	墳丘盛り土土器と接合
66	S126 3層	弥生土器 甕	口18.6 △2.4	口縁部～頸部	外面　口縁部3条の沼線、頸部ナデ 内面　口縁部ナデ、頸部ナデ	密	外面　にぶい黄橙色 内面　橙色	良好	
71	S128 床面付近	弥生土器 壺	口22.4 △12.0	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沼線、刷毛刺突文、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、頸部ハケ、頸部以下ケズリ	密	内外面　橙色	良好	
72	S128 P19埋土中	弥生土器 広口壺	口19.8 △2.8	口縁部～頸部	外面　口縁部4条の沼線、頸部ナデ 内面　口縁部4条の波状沈線、円形浮文、頸部ナデ	密	内外面　橙色	良好	
73	S128 埋土中	弥生土器 甕	口14.2 △7.2	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	外面　黄褐色 内面　橙色	良好	
74	S128 埋土中	弥生土器 甕	口13.2 △4.6	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沼線、体部不明 内面　口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	外面　黄橙色 内面　褐灰色	良好	
75	S128 埋土中	弥生土器 甕	口17.9 △9.7	口縁部～体部上半	外面　口縁部5条の沼線、刷毛刺突文、体部不明 内面　口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	外面　にぶい橙色 内面　黄橙色	良好	外面煤付着
76	S131 埋土中	弥生土器 甕	口17.4 △1.9	口縁部	外面　口縁部5条の沼線 内面　ナデ	密	外面　灰黄褐色 内面　灰褐色	良好	
77	S131 埋土中	弥生土器 甕	口14.8 △6.4	口縁部～体部上半	外面　口縁部2条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、頸部以下ナデ	密	内外面　明黄褐色	やや不良	外面煤付着
78	S131 埋土中	弥生土器 高杯	口18.6 △2.6	坏部	外面　口縁部3条の沼線、坏部下半ナデ 内面　口縁部ナデ、坏部下半ハケ	密	内外面　明黄褐色	やや不良	
79	S135 床面	弥生土器 長頸壺	— △8.7	頸部	外面　ハケ後4条の沼線 内面　ハケ	密	外面　浅黄橙色・橙色 内面　黒褐色	良好	
80	S135 9層	弥生土器 甕	口12.6 △9.7	口縁部～体部上半	外面　口縁部2条の沼線、体部タタキ後ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ナデ	密	外面　にぶい黄橙色 内面　明黄褐色・暗灰黄色	良好	
81	S135 後下層	弥生土器 甕	口19.1 △3.2	口縁部～頸部	外面　口縁部2条の沼線、頸部ナデ 内面　口縁部ナデ、頸部ナデ	密	内外面　橙色	良好	
82	S135 床面	弥生土器 甕	口17.4 △2.7	口縁部	外面　2条の沼線 内面　ナデ	密	内外面　浅黄橙色	良好	
83	S135 2層	弥生土器 造小高坏	— △3.9	脚筒部	外面　ハケ後櫛歯文、端部2条の沼線 内面　ハケ後ナデ	密	内外面　にぶい黄橙色	良好	
84	S136 3層	弥生土器 広口壺	口24.4 △3.0	口縁部	外面　端部3条の沼線、下半タタキ後ナデ 内面　ナデ	普通	外面　浅黄色・オリーブ黒色 内面　浅黄色	やや良好	
85	S136 1層	弥生土器 広口壺	口11.5 △4.2	口縁部～頸部	外面　口縁部3条の沼線、頸部ハケ 内面　口縁部ナデ、頸部ナデ	やや密	内外面　浅黄橙色	やや良好	外面及内面口縁端部赤彩
86	S136 2層	弥生土器 壺	口14.1 △2.4	口縁部～頸部	外面　口縁部2条の沼線、頸部ナデ 内面　口縁部ナデ、頸部ナデ	普通	外面　浅黄橙色・橙色 内面　橙色	良好	
87	S136 2層	弥生土器 甕	口17.1 △2.7	口縁部～頸部	外面　口縁部3条の沼線、頸部不明 内面　不明	やや粗	内外面　にぶい黄橙色	やや不良	

表4　土器観察表（4）

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm)器高(cm)	部位	調整・文様		胎土	色調		焼成	備考
88	S137 埋土中	弥生土器 広口壺	復22.8 △1.7	口縁部	外面	3条の回線後櫛描文	普通	外面	淡黄色・にぶい黄橙色	普通	
					内面	3条の回線後櫛描文		内面	淡黄色		
89	S137 埋土中	弥生土器 広口壺	復19.3 △2.7	口縁部	外面	4条の回線	普通	外面	にぶい・浅黄橙色・褐灰色・橙色	やや不良	
					内面	4条の回線		内面	にぶい・浅黄橙色・橙色		
90	S137 床面	弥生土器 壺	— △6.3	頸部～胴部	外面	4条の回線残存,胴部刺突文	やや粗	内外面	にぶい黄橙色・橙色	やや不良	広口壺か長頸壺
					内面	不明					
91	S137 埋土中	弥生土器 壺	復19.9 △6.2	口縁部～体部上半	外面	口縁部5条の回線,胴部刺突文,体部ハケ一部ミガキ	普通	内外面	褐灰色・にぶい黄橙色	普通	
					内面	口縁部ナデ,胴部ハケ,胴部以下ケズリ					
92	S137 埋土中	弥生土器 甕	復18.8 △12.9	口縁部～体部上半	外面	口縁部3条の回線,胴部貼付突帯,体部不明	やや粗	内外面	浅黄橙色	やや不良	
					内面	口縁部ナデ,体部ハケ					
93	S137 埋土中	弥生土器 甕	復17.6 △20.7	口縁部～体部下半	外面	口縁部3条の回線,体部ハケ後ミガキ	普通	外面	淡黄色・黄褐色・褐灰色	普通	外面煤付着
					内面	口縁部ナデ,体部上半ハケ,下半ケズリ		内面	淡黄色		
94	S137 床面付近	弥生土器 甕	復15.8 △2.4	口縁部～頸部	外面	口縁部3条の回線,頸部不明	やや粗	内外面	明黄褐色・浅黄橙色	やや不良	
					内面	不明					
95	S132 壁溝上面	弥生土器 甕	復16.2 △10.3	口縁部～体部上半	外面	口縁部2条の回線,体部ハケ	普通	外面	にぶい黄褐色・褐灰色・橙色	普通	
					内面	口縁部ナデ,体部ハケ		内面	にぶい黄橙色・褐灰色		
96	S137 埋土中	弥生土器 甕	復15.6 △20.0	口縁部～体部下半	外面	口縁部3条の回線,体部ハケ後ミガキ	やや粗	内外面	橙色・にぶい黄橙色	やや不良	
					内面	口縁部ナデ,体部上半ハケ,下半ケズリ					
97	S132 埋土中	弥生土器 高坏	復17.8 △5.1	坏部	外面	口縁部5条の回線,坏部不明	粗	内外面	にぶい黄橙色	不良	
					内面	不明					
98	S132 埋土中	弥生土器 壺か高坏	— △4.1	脚部	外面	端部2条を含む多条の回線残存	普通	外面	灰白色・橙色	普通	外面赤彩
					内面	ケズリ		内面	灰白色・浅黄色		
99	S55 1層	弥生土器 壺か甕	— △3.6	底部	外面	ナデ	密	内外面	淡黄色	良好	
					内面	ケズリ					
100	S57 埋土中	弥生土器 甕	復12.7 △8.1	口縁部～体部上半	外面	口縁部3条の回線,体部ハケ	密	内外面	黄橙色	良好	
					内面	口縁部ナデ,体部ハケ					
101	S58 1層	弥生土器 甕	復12.7 △4.7	口縁部～胴部	外面	口縁部3条の回線後ヤザミ,体部ハケ	密	外面	浅黄色	良好	外面煤付着
					内面	口縁部ナデ,体部ハケ		内面	淡黄色		
102	S511 1層	弥生土器 壺	復20.8 △4.7	口縁部～頸部	外面	口縁部5条の回線,頸部ハケ	普通	内外面	にぶい黄橙色	普通	
					内面	口縁部3条の回線,頸部ハケ					
103	S511 1層	弥生土器 甕	復17.8 △2.8	口縁部～頸部	外面	口縁部3条の回線,頸部ナデ	普通	内外面	にぶい黄橙色	普通	
					内面	口縁部ナデ,頸部ナデ					
104	S511 1層	弥生土器 甕	復15.2 △7.6	口縁部～体部上半	外面	口縁部2条の回線,体部ハケ	普通	外面	にぶい・褐色・にぶい赤褐色	普通	外面煤付着
					内面	口縁部ナデ,体部上半ハケ,下半ケズリ		内面	にぶい黄褐色・橙色		
105	S511 1層	弥生土器 壺？	— △18.1	胴張部～頸部	外面	ハケ後張部29条の回線残存,頸部11条の回線	普通	外面	浅黄橙色	普通	
					内面	張部ケズリ,頸部ナデ		内面	淡黄色・黄灰色		
106	S511 1層	弥生土器 壺？	— △9.2	胴張部～頸部	外面	ハケ後張部4条1単位の回線15段,頸部3条の回線,貫通しない三角形透かし	やや密	外面	にぶい黄橙色	良好	外面赤彩
					内面	張部ケズリ,頸部ナデ		内面	にぶい褐色		
107	S510 4層	弥生土器 甕	復17.5 △3.3	口縁部～頸部	外面	口縁部3条の回線,体部不明	密	外面	淡赤橙色・橙色	良好	
					内面	口縁部ナデ,体部不明		内面	橙色		
108	S580 2層	弥生土器 広口壺	復21.4 △4.9	口縁部～頸部	外面	口縁部4条の回線,頸部ナデ	密	内外面	淡黄色	良好	
					内面	口縁部波状沈線,頸部ナデ					
109	S580 4層	弥生土器 壺	復17.0 △14.2	口縁部～体部上半	外面	口縁部5条の回線,体部ナデヤ	密	外面	黄橙色	良好	
					内面	口縁部ナデ,頸部ナデ,頸部以下ケズリ		内面	浅黄橙色		
110	S580 2層	弥生土器 甕	復14.4 △5.4	口縁部～頸部	外面	口縁部4条の回線,頸部刺突文,体部ハケ	密	内外面	浅黄橙色	良好	
					内面	口縁部ナデ,体部ハケ					
111	S580 底面上面	弥生土器 甕	復19.0 △5.0	口縁部～頸部	外面	口縁部3条の回線,頸部貼付突帯,体部ハケ	密	外面	にぶい黄橙色	良好	外面煤付着
					内面	口縁部ナデ,体部ハケ		内面	黄橙色		
112	S580 2層	弥生土器 甕	復13.3 △5.1	口縁部～頸部	外面	口縁部2条の回線,体部ハケ	密	内外面	淡黄色	良好	
					内面	口縁部ナデ,体部ハケ					
113	S580 2層	弥生土器 甕	復17.4 △9.6	口縁部～体部上半	外面	口縁部2条の回線,体部ハケ	密	内外面	浅黄橙色～黄橙色	良好	外面煤付着
					内面	口縁部ナデ,体部ハケ					
114	S630b 底面	弥生土器 甕	復19.0 △4.8	口縁部～頸部	外面	口縁部2条の回線,体部ハケ	密	外面	黄橙色	良好	
					内面	口縁部ナデ,体部ハケ		内面	にぶい黄橙色		

表5　土器観察表（5）

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm)器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
115	SK92b 炭上面	弥生土器 甕ウ	— △4.6	底部	外面　不明 内面　ケズリ	密	外面　橙色 内面　にぶい黄橙色	良好	
117	SK93 上層(1+2層)	弥生土器 甕	帯17.3 △2.9	口縁部～頸部	外面　口縁部ナデ、頸部貼付突帯 内面　口縁部ナデ	密	内外面　にぶい黄橙色	良好	
118	SK93 1層	弥生土器 甕	帯16.6 △19.1	口縁部～体部下半	外面　口縁部2条の沼線、体部タタキ後ハケ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ、下半ケズリ	密	外面　橙色 内面　黄橙色	良好	
119	SK99 2層	弥生土器 甕	帯15.4 △2.3	縁部	外面　3条の沼線 内面　ナデ	密	内外面　にぶい黄橙色	良好	外面煤付着
120	SK99 1層	弥生土器 高坏	帯20.1 △2.7	坏部	外面　端部2条を含め6条の沼線 内面　ナデ	密	外面　浅黄橙色 内面　淡黄色	良好	
121	SK100 底面付近	弥生土器 甕	帯12.8 △17.3	口縁部～体部下半	外面　口縁部1条の沼線、刺突刻突文、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ、下半ケズリ	密	内外面　橙色	良好	外面煤付着
122	SK100 底面付近	弥生土器 甕	帯15.0 △16.0	口縁部～体部下半	外面　口縁部2条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ？、下半ケズリ	密	内外面　黄橙色	良好	外面煤付着
123	SK100 12層	弥生土器 甕	帯12.4 △8.0	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ？、下半ケズリ	密	内外面　黄橙色	良好	外面煤付着
124	SK100 5層	弥生土器 甕	帯17.8 △4.9	口縁部～肩部	外面　口縁部2条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ナデ	密	内外面　にぶい黄橙色	良好	
125	SK100 4層	弥生土器 甕	帯19.4 △6.6	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沼線、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、頸部こびガキ、体部ハケ	密	外面　黄橙色 内面　明黄橙色	良好	
126	SK100 4層	弥生土器 甕	帯16.4 △7.9	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	外面　にぶい橙色 内面　にぶい黄橙色	良好	
127	SK100 1層	弥生土器 甕	帯17.3 △21.0	口縁部～体部下半	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ後ナデ、下半ケズリ	密	内外面　浅黄橙色～灰白色	良好	外面煤付着
128	SK105 埋土中	弥生土器 甕	帯16.9 △4.5	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	外面　にぶい黄橙色 内面　浅黄色	良好	外面煤付着
129	SK105 埋土中	弥生土器 甕	帯15.4 △5.4	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　ナデ	密	内外面　にぶい黄橙色	良好	
130	SK105 埋土中	弥生土器 甕	帯14.2 △7.6	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	内外面　橙色	良好	外面煤付着
131	SK105 埋土中	弥生土器 甕	帯15.6 △18.1	口縁部～体部下半	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ後ミガキ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ、下半ケズリ	密	外面　にぶい黄橙色 内面　浅黄橙色	良好	外面煤付着
132	SK105 埋土中	弥生土器 甕	帯14.8 △19.9	口縁部～肩部	外面　口縁部2条の沼線、頸部貼付突帯、肩部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部不明	密	内外面　淡黄色	良好	
133	SK105 埋土中	弥生土器 甕	帯14.0 △19.9	口縁部～体部下半	外面　口縁部2条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ、下半ケズリ	密	外面　黄橙色～明黄褐色 内面　浅黄橙色～褐灰色	良好	外面煤付着
134	SK105 埋土中	弥生土器 甕	帯16.2 △6.9	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沼線後キザミ、肩部刺突文、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	密	内外面　浅黄橙色	良好	
135	SK105 埋土中	弥生土器 壺か高坏	— △5.5	脚筒部～脚部	外面　筒部ハケ、脚部6条の沼線文 内面　脚部ケズリ	密	外面　黒褐色 内面　褐灰色	良好	
136	SK121 2層	弥生土器 甕か壺	帯3.9 9.4	口縁部～底部	外面　口縁部ナデ、体部ハケ後ミガキ 内面　ナデ	普通	外面　淡黄色・黄灰色・浅黄橙色 内面　にぶい黄橙色	普通	色などの識別絵画
137	SK121 3層	弥生土器 甕	帯17.6 △7.2	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	普通	内外面　橙色	普通	
138	SK121 3層	弥生土器 甕	帯15.4 △17.8	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、体部上半ハケ、下半ケズリ	普通	外面　暗灰黄色・黒褐色・灰白色 内面　浅黄色	普通	外面煤付着
139	SK121 4層	弥生土器 甕	帯21.8 △9.1	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沼線、頸部貼付突帯、体部ハケ後ミガキ 内面　口縁部ナデ、体部ハケ	普通	外面　浅黄色・黄灰色 内面　灰白色・黄灰色	普通	
140	SK122 検出面	弥生土器 甕	帯15.8 △4.4	口縁部～頸部	外面　口縁部3条の沼線、頸部ナデ 内面　口縁部ナデ、頸部以下ナデ	普通	内外面　橙色	良好	外面煤付着
141	SK122 2層	弥生土器 甕	帯11.6 △5.0	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沼線、体部ハケ 内面　口縁部ナデ、頸部以下ハケ	密	外面　黄橙色 内面　にぶい黄橙色	良好	
142	SK123 埋土中	弥生土器 甕	帯17.0 △2.3	口縁部～頸部	外面　口縁部3条の沼線、頸部ナデ 内面　口縁部ナデ、頸部以下ハケ	密	外面　橙色 内面　にぶい黄橙色	良好	

表6　土器観察表（6）

遺物No.	遺構層位	器種	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調		焼成	備考
143	SK123 埋土中	弥生土器 壺か高坏	壺	— △2.6	脚柱部	外面　4条の沿線残存,端部ナデ 内面　ケズリ,板目ナデ	密	外面 内面	にぶい橙色 明黄褐色	良好	外面赤彩
144	SK127 埋土中	弥生土器 壺	壺	⊕15.4 △28.6	口縁部～体部下半	外面　口縁部3条の沿線,体部タタキ後ハケ,下半ミガキ 内面　口縁部ナデ,体部上半ハケ,下半ケズリ	密	内外面	黄橙色・浅黄橙色・にぶい黄橙色	良好	
145	SK127 埋土中	弥生土器 壺	壺	⊕21.2 △5.3	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沿線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
146	SK127 埋土中	弥生土器 壺	壺	⊕14.8 △5.4	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沿線,体部不明 内面　口縁部ナデ,端部以下ハケ	密	内外面	浅黄橙色	良好	
147	SK127 4層	弥生土器 壺	壺	⊕21.7 △13.1	口縁部～体部上半	外面　口縁部2条の沿線,端部貼付突帯,体部不明 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	普通	内外面	浅黄色	普通	外面煤付着
148	SK127 埋土中	弥生土器 高坏	高坏	⊕32.0 △5.1	坏部	外面　口縁端部ナデ,口縁部直下貼付突帯,下半ハケ 内面　上半ナデ,下半ハケ	密	外面 内面	にぶい橙色 黄橙色	良好	
149	SK127 埋土中	弥生土器 壺か高坏	壺	— △6.0	脚筒部～脚部	外面　筒部ナデ,脚部4条の沿線,端部ナデ 内面　筒部ケズリ,脚部ナデ	密	外面 内面	橙色 橙色・にぶい黄橙色	良好	
150	SK74 3層	弥生土器 壺	壺	⊕13.6 △15.6	口縁部～体部下半	外面　口縁部4条の沿線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	内外面	浅黄橙色～黄橙色	やや不良	外面煤付着
151	SK74 3層	弥生土器 壺	壺	⊕19.0 △4.0	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沿線,端部ハケ 内面　口縁部ナデ,端部以下ハケ	密	内外面	浅黄橙色	良好	
152	SK76 埋土中	弥生土器 壺	壺	⊕17.0 △8.0	口縁部～体部上半	外面　口縁部1条の沿線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	外面 内面	浅黄橙色 浅黄橙色・明褐色	良好	
153	SK76 埋土中	弥生土器 壺	壺	⊕19.4 △2.9	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沿線,端部ナデ 内面　口縁部ナデ,端部以下不明	密	外面 内面	黄橙色 明黄褐色	良好	
154	SK76 埋土中	弥生土器 壺か高坏	壺	— △7.6	脚筒部～脚部	外面　筒部から脚部間隔文,貫通しない三角形透かし 内面　筒部シボリ,下半ハケ,脚部ナデ	密	外面 内面	浅黄橙色 黄橙色	良好	
155	SK77 近面	弥生土器 壺	壺	⊕11.0 △2.9	口縁部～肩部	外面　口縁部2条の沿線,端部ナデ 内面　口縁部ナデ,端部ハケ	密	内外面	橙色	良好	
156	SK94 1層	弥生土器 壺	壺	⊕13.2 △16.3	口縁部～体部下半	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部上半ハケ,下半ケズリ	密	内外面	浅黄橙色	良好	
157	SK95 1層	弥生土器 壺	壺	⊕17.6 △3.2	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沿線,端部ナデ 内面　口縁部ナデ,端部ナデ	密	内外面	淡黄色	良好	
158	SK101 埋土中	弥生土器 壺	壺	⊕20.0 △5.7	口縁部～肩部	外面　口縁部4条の沿線,端部貼付突帯,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	内外面	浅黄橙色	良好	
159	SK104 埋土中	弥生土器 壺	壺	⊕14.6 △6.3	口縁部～肩部	外面　口縁部2条の沿線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	普通	内外面	にぶい黄橙色	普通	
160	SK115 11層	弥生土器 壺	壺	⊕13.8 △4.7	口縁部～肩部	外面　口縁部4条の沿線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	外面 内面	浅黄橙色 橙色	良好	
161	SK106 埋土中	弥生土器 壺	壺	⊕19.6 △7.0	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沿線,端部貼付突帯,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部不明	やや粗	内外面	浅黄橙色～灰黄褐色	やや不良	
162	SK106 埋土中	弥生土器 壺	壺	⊕14.4 △5.0	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沿線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,ナデ	密	外面 内面	浅黄橙色～橙色 浅黄橙色	やや不良	外面煤付着
163	SK118 1層	弥生土器 壺	壺	⊕12.4 △3.9	口縁部～肩部	外面　ナデ 内面　ナデ	やや密	内外面	にぶい黄橙色	良好	外面赤彩,外面煤付着
164	SK118 1層	弥生土器 壺	壺	⊕17.6 △8.7	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沿線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部不明	やや粗	外面 内面	灰白色・浅黄橙色 浅黄橙色	普通	
165	SK119 埋土下層	弥生土器 壺	壺	⊕17.8 △6.2	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沿線,端部貼付突帯,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	普通	外面 内面	にぶい黄橙色・にぶい橙色 浅黄橙色・灰黄褐色	不良	
166	SK119 埋土下層	弥生土器 壺	壺	⊕16.4 △4.5	口縁部～肩部	外面　口縁部3条の沿線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ナデ	普通	外面 内面	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	普通	
168	SK126 2層	弥生土器 壺	壺	⊕28.0 △3.0	口縁部	外面　端部2条の沿線,下半ハケ 内面　ハケ,端部ナデ	密	内外面	淡黄色	良好	
169	SK126 1層	弥生土器 壺	壺	⊕21.2 △6.4	口縁部～肩部	外面　口縁部4条の沿線,端部ハケ 内面　不明	密	外面 内面	浅黄橙色 淡黄色	良好	
170	SK126 2層	弥生土器 壺	壺	⊕16.8 △10.5	口縁部～肩部	外面　口縁部2条の沿線,端部ハケ後3条の沿線残存 内面　口縁部ナデ,端部不明	密	内外面	浅黄橙色	良好	

表7　土器観察表（7）

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調		焼成	備考
171	SK126 2層	弥生土器 甕	口14.0 △9.0	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沼線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	内外面　浅黄橙色		良好	外面煤付着
172	SK137 埋土中	弥生土器 脚付壺	口14.0 46.2	口縁部～脚柱部	外面　口縁部3条の沼線後円形浮文,ヤザミ,体部ハケ後上半ミガキ,体部最大径部分4条の貼付突帯後横位浮文,筒部上半4条の沼線,下半ハケ後ミガキ,3～8条の沼線,脚部3条の沼線 内面　口縁部ナデ,体部ハケ後下半ミガキ,筒部上半ジポリ,下半ハケ,脚部ナデ	普通	内外面	暗灰黄色・浅黄色・黄灰色・黒褐色	やや良好	
173	SK137 埋土中	弥生土器 壺	— △12.3	胴部	外面　ハケ後4条の沼線 内面　ハケ	密	外面 内面	灰黄褐色～に赤黄橙色 浅黄色	良好	広口壺か長胴壺
174	SK137 埋土中	弥生土器 甕	口11.0 △11.5	口縁部～体部下半	外面　口縁部3条の沼線後ヤザミ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	内外面	浅黄橙色～赤橙色	良好	
175	SK137 埋土中	弥生土器 甕	口18.6 △15.9	口縁部～体部上半	外面　口縁部3条の沼線,胴部貼付突帯,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部不明	密	外面 内面	浅黄橙色 浅黄色～灰白色	良好	
176	墳丘墓 西側区南溝	弥生土器 広口壺	口19.4 △4.5	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線,胴部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部ハケ	密	外面 内面	黄灰色 浅黄色～黄灰色	良好	内外面煤付着
177	墳丘墓 西側区南溝	弥生土器 甕	— △3.5	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の沼線,胴部貼付突帯 内面　口縁部ナデ,胴部以下ナデ	密	外面 内面	浅黄色 黄灰色	良好	
178	墳丘墓 西側区南溝	弥生土器 甕	口16.4 △4.8	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の沼線,体部ナデ 内面　口縁部ナデ,体部ナデ	密	外面 内面	橙色・黄橙色 橙色	良好	
179	墳丘墓 西側区南溝	弥生土器 甕	口17.2 △4.0	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線,胴部ナデ,体部不明 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	内外面	橙色	良好	
180	墳丘墓 墳頂部	弥生土器 壺か甕坪	— △3.4	胴部	外面　刺重文及び沼5条の沼線,透かしの痕跡あり 内面　ケズリ,胴部ナデ	密	外面 内面	に赤い黄橙色 黄橙色	良好	
181	墳丘墓 墳丘側部	弥生土器 鉢	口38.8 △4.7	口縁部～体部上半	外面　口縁部直下に波状及び直線の沈線 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	内外面	浅黄色	良好	外面赤彩
182	墳丘墓 墳丘側部	弥生土器 壺	— △7.2	胴部破片	外面　ハケ 内面　ハケ	普通	外面 内面	に赤い黄橙色・浅黄色・橙色 に赤い黄橙色	普通	外面に少なくとも線刻絵画,彩
183	SK116 底面	弥生土器 広口壺	— △8.1	口縁部～胴部	外面　口縁部1条の沼線後ナデ,胴部ハケ 内面　口縁部2条の沼線,胴部ハケ	密	内外面	浅黄橙色	普通	
184	SK116 底面	弥生土器 甕	口18.8 △5.2	口縁部～胴部	外面　口縁部3条の沼線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	外面 内面	黄橙色 浅黄橙色	良好	外面煤付着
185	SK116 底面	弥生土器 甕	口15.4 △8.8	口縁部～体部上半	外面　口縁部2条の沼線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部上半ハケ,下半ケズリ	密	内外面	黄橙色・に赤い褐色	良好	外面煤付着
186	S116 9層	土師器 直口壺	口11.7 △9.7	口縁部～胴部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	普通	外面 内面	浅黄橙色 黄橙色	良好	
187	S116 13層	土師器 小型丸底壺	— △8.8	胴部～底部	外面　胴部ナデ,体部ハケ 内面　胴部以下ケズリ	密	内外面	浅黄橙色	良好	外面煤付着
188	S116 9層	土師器 小型丸底壺	— △6.2	胴部～底部	外面　胴部ナデ,体部ハケ 内面　胴部以下ケズリ	密	外面 内面	灰黄色 灰色	良好	
189	S116 13層	土師器 小型丸底壺	口6.5 12.3	口縁部～底部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面 内面	橙色 浅黄橙色	良好	
190	S116 16層	土師器 小型丸底壺	口6.0 8.2	口縁部～底部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ハケ後ナデ,胴部以下ケズリ	密	内外面	浅黄色	良好	
191	S116 床面	土師器 甕	口19.0 △3.9	口縁部	外面　ナデ 内面　ナデ	密	内外面	浅黄色	良好	
192	S116 13層	土師器 甕	13.2 △15.2	口縁部～底部上半	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面 内面	に赤い黄橙色 明黄橙色	良好	
193	S116 床面	土師器 甕	口13.6 △12.7	口縁部～底部上半	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	内外面	浅黄橙色	良好	外面煤付着
194	S116 12層	土師器 甕	13.4 25.9	口縁部～底部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	普通	外面 内面	浅黄色　底部黄橙色 浅色	良好	外面煤付着
195	S116 13層	土師器 甕	14.4 28.6	口縁部～底部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ,底部ユビオサエ	密	外面 内面	に赤い黄橙色 浅黄橙色	良好	外面煤付着
196	S116 13層	土師器 底坪	15.4 △5.5	坪部	外面　ハケ後ナデ 内面　ナデ,下半放射状のミガキ	密	内外面	橙色	良好	内外面赤彩

表8　土器観察表（8）

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調		焼成	備考
197	S116 9層	土師器 高坏	22.2 △6.2	坏部	外面　ハケ後ナデ 内面　ナデ	密	外面　浅黄橙色 内面　黄橙色		良好	
198	S119 床面付近	土師器 高坏	16.8 12.5	坏部～脚部	外面　坏部ハケ後ナデ,脚部ナデ 内面　坏部ナデ,筒部シボリ,脚部ユビオサエ	普通	内外面　黄橙色・橙色		やや良好	
199	S119 3層	土師器 甕	復16.2 △4.1	口縁部	外面　ナデ 内面　ナデ	普通	外面　浅黄橙色・褐灰色 内面　浅黄橙色		やや不良	
200	S119 3層	土師器 甕	復14.6 △3.5	口縁部	外面　ナデ 内面　ナデ	普通	内外面　にぶい黄橙色		普通	
201	S119 2層	土師器 甕	復13.8 △4.6	口縁部	外面　ナデ 内面　ナデ	普通	外面　橙色・明黄褐色 内面　明黄褐色・褐灰色		普通	
202	S119 3層	土師器 甕	復14.8 △5.1	口縁部	外面　ナデ 内面　ナデ	普通	外面　にぶい黄橙色・灰黄色 内面　にぶい黄橙色		普通	
203	S119 2層	土師器 甕	復14.8 △6.3	口縁部～頸部	外面　ナデ 内面　口縁部ナデ,頸部以下不明	やや粗	外面　浅黄橙色・明黄褐色・黄灰色・黒色 内面　灰白色・灰黄色・黒色		やや不良	
204	S119 3層	土師器 甕	復13.3 △17.7	口縁部～体部上半	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,頸部ユビオサエ,体部ケズリ	普通	内外面　橙色・浅黄橙色・にぶい黄橙色・灰色		普通	外面煤付着
205	S119 2層	土師器 甕	復15.5 △15.8	口縁部～体部上半	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,頸部以下ケズリ	普通	外面　浅黄色 内面　にぶい黄橙色		普通	
206	S119 3層	土師器 高坏	— △3.2	坏部	外面　不明 内面　不明	やや粗	内外面　黄橙色・橙色		やや不良	
207	S119 3層	土師器 高坏	— △2.5	坏部	外面　ハケ後ナデ 内面　不明	普通	内外面　橙色・にぶい黄橙色		普通	
208	S119 P3埋土中	土師器 高坏	— △2.7	坏部	外面　ナデ 内面　不明	普通	内外面　橙色		普通	
209	S119 3層	土師器 高坏	— △3.6	坏部	外面　ナデ 内面　ナデ	やや粗	外面　にぶい黄褐色・にぶい橙色・明赤褐色 内面　黒色・灰褐色・黒褐色		普通	
210	S119 床面	土師器 高坏	— △5.0	坏部～脚筒部	外面　不明 内面　不明	やや粗	内外面　橙色		やや不良	
211	S119 3層	土師器 高坏	— △6.4	脚筒部～裾部	外面　ナデ 内面　筒部シボリ,裾部ハケ	やや粗	内外面　浅黄橙色・橙色		やや不良	
212	S124 壁溝上面	土師器 小型丸底壺	復5.9 △3.5	口縁部～体部下半	内面　口縁部ナデ,体部ナデ 外面　口縁部ナデ,体部ユビオサエ後ナデ	普通	内外面　橙色		普通	
213	S124 6層	土師器 小型丸底壺	— △6.2	頸部～体部下半	外面　不明 内面　体部上半ユビオサエ,下半ケズリ	やや粗	内外面　橙色・浅黄橙色		やや不良	
214	S124 3～4層	土師器 甕	復15.3 △11.6	口縁部～体部上半	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,頸部以下ケズリ	やや粗	外面　にぶい黄橙色・褐灰色 内面　にぶい黄橙色		普通	外面煤付着
215	S124 埋土中	土師器 甕	復15.3 △5.6	口縁部～肩部	外面　不明 内面　口縁部ナデ,頸部以下ケズリ	やや粗	外面　にぶい黄橙色～黒褐色 内面　にぶい黄橙色		普通	
216	S124 埋土中	土師器 甕	復15.2 △8.6	口縁部～肩部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,頸部以下ケズリ	普通	外面　にぶい黄橙色 内面　灰黄褐色		普通	
217	S124 1層	土師器 甕	復15.2 △13.7	口縁部～体部上半	外面　口縁部不明,体部ハケ 内面　不明	やや粗	内外面　浅黄橙色		やや不良	外面煤付着
218	S124 P5埋土中	土師器 甕	復13.4 △7.4	口縁部～肩部	外面　不明 内面　不明	やや粗	内外面　にぶい黄橙色・黄灰色		やや不良	
219	S124 床面	土師器 低脚坏	14.6 3.9	坏部～脚部	外面　不明 内面　不明	やや粗	内外面　橙色		やや不良	
220	S124 3～4層	土師器 低脚坏	— △3.9	坏部下半～脚部	外面　ナデ 内面　不明	普通	内外面　浅黄橙色・橙色		普通	
221	S139 1層	土師器 高坏	— △2.3	坏部	外面　ハケ 内面　不明	やや粗	内外面　橙色		やや不良	
222	S139 1層	土師器 高坏	— △4.2	脚筒部	外面　不明 内面　不明	やや粗	内外面　橙色		やや不良	
223	S134 床面付近	土師器 小型丸底壺	5.9 7.2	口縁部～底部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,頸部以下ケズリ	やや密	内外面　浅黄色・橙色・褐灰色		やや良好	外面及び口縁部内面赤彩

表9　土器観察表（9）

遺物No.	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
224	S134 床面付近	土師器 甕	中13.0 △9.1	口縁部～体部上半	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,刷目コビキサエ,刷目以下ケズリ	やや粗	内外面　橙色・明黄褐色・灰黄褐色	やや不良	
225	S134 床面付近	土師器 甕	中15.4 △2.7	口縁部	外面　不明 内面　不明	やや粗	外面　橙色 内面　橙色・赤灰色	やや不良	
226	S134 床面付近	土師器 甕	中14.0 △3.1	口縁部	外面　ナデ 内面　ナデ	普通	内外面　にぶい黄橙色・橙色・褐灰色	普通	
227	S134 床面付近	土師器 高坏	— △4.4	坏部下半	外面　不明 内面　不明	やや粗	内外面　淡橙色	やや不良	
228	S134 P4埋土中	土師器 高坏	— △5.7	脚筒部～裾部	外面　不明 内面　不明	やや粗	内外面　橙色・にぶい黄橙色	やや不良	
229	S130 2層	須恵器 坏	中14.8 △3.0	口縁部	外面　ナデ 内面　ナデ	密	内外面　橙色	良好	内外面赤彩
230	S130 2層	須恵器 坏	中12.7 △2.3	口縁部	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	密	内外面　灰色	良好	
231	S132 1層	土師器 甕	中38.5 △6.2	口縁部～胴部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　褐灰色 内面　浅黄橙色	良好	外面煤付着
232	S132 床面付近	土師器 甕	中26.0 △2.9	口縁部～胴部	外面　口縁部ナデ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　にぶい黄橙色 内面　灰褐色	良好	
233	S132 1層	須恵器 坏	中12.8 △3.6	口縁部～体部上半	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	密	内外面　灰白色	良好	
234	S132 埋土中	須恵器 坏	中12.7 △3.8	口縁部～体部上半	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	密	内外面　灰色	良好	
235	S132 埋土中	須恵器 坏	— △3.1	体部下半～底部	外面　回転ナデ,底部回転糸切り 内面　回転ナデ	密	外面　オリーブ褐色 内面　灰色	良好	
236	S132 2層	須恵器 蓋	— △2.2	底部	外面　不明 内面　不明	密	内外面　灰白色	不良	
237	SK107 埋土下層	土師器 甕	中18.6 △4.2	口縁部～胴部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,胴部以下ケズリ	密	外面　灰黄褐色 内面　にぶい黄橙色	良好	
238	SK107 5層	土師器 坏	中12.0 △2.3	口縁部	外面　ナデ 内面　ナデ	密	内外面　明赤褐色	良好	内外面赤彩
239	SK107 2層	須恵器 坏	中12.8 3.9	口縁部～底部	外面　回転ナデ,底部回転糸切り 内面　回転ナデ	密	内外面　灰色	良好	
240	SK107 底面付近	須恵器 坏	— △7.0	体部下半～底部	外面　回転ナデ,底部回転糸切り 内面　回転ナデ	密	内外面　灰色	良好	
241	SK107 2層	須恵器 坏	中16.9 △3.9	口縁部～体部上半	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	密	内外面　灰色	良好	
242	SB3 覆土中	須恵器 坏	— △3.4	体部下半～底部	外面　回転ナデ,底部回転糸切り 内面　回転ナデ	密	外面　灰白色 内面　淡黄色	良好	
244	6区遺構外 黒灰色土	弥生土器 甕	中15.2 △9.0	口縁部～体部上半	外面　口縁部2条の沼線,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部不明	密	外面　黄橙色・黒褐色 内面　黄橙色	良好	
245	6区遺構外 黄褐色土	弥生土器 甕	中17.2 △3.7	口縁部～胴部	外面　口縁部2条の沼線,体部ナデ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	内外面　灰白色	良好	
246	6区遺構外 黄褐色土	弥生土器 甕	中18.5 △4.8	口縁部～胴部	外面　口縁部2条の沼線,体部タタキ後ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ	密	内外面　にぶい黄橙色	良好	
247	6区遺構外 黒灰色土	弥生土器 甕	中18.2 △6.1	口縁部～胴部	外面　口縁部4条の沼線,端部記付突帯,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部ハケ後ナデ	密	外面　橙色・にぶい褐色 内面　橙色・黄橙色	良好	外面煤付着
248	6区遺構外 黒灰色土	弥生土器 壺か甕坏	— △15.3	脚筒部～裾部	外面　筒部ハケ後3条1単位の沼線,その間に貫通しない三角形透かし,下半に矢羽根状の沼線文,裾部ハケ後3条の沼線,端部2条の沼線 内面　筒部ケズリ,裾部ナデ	密	外面　にぶい黄橙色 内面　黄橙色	良好	外面赤彩
249	6区遺構外 黒灰色土	弥生土器 壺	中6.8 △13.9	口縁部～胴部	外面　口縁部ナデ,胴部ミガキ 内面　口縁部ナデ,胴部シボリ	密	内外面　浅黄橙色	良好	外面及び口縁部内面赤彩
250	6区遺構外 黒灰色土	弥生土器 コップ形土器	中5.3 6.9	口縁部 底部	外面　口縁部ナデ,体部ハケ 内面　口縁部ナデ,体部コビキサエ	密	外面　黒褐色 内面　浅黄橙色	良好	

表10　土製品観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	法量				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	
6	SI14	上層	紡錘車	3.9	3.6	0.6	0.6	焼成後、両面から穿孔
20	SI17	埋土中	土錘	3.2	1.8	1.6	—	器体中央を縦に巡る溝
67	SI26	床面	土玉	2.5	3.1	—	0.6	半分に欠損
68	SI26	1層	土玉	3.1	3.5	—	0.6	
69	SI26	1～2層	分銅形土製品	△2.7	△2.8	1.1	—	表面に連続する刺突文。表裏両面赤彩。端部に3個の穿孔
70	SI26	1～2層	分銅形土製品	△3.3	3.5	0.7	—	表面くびれ部に3条の沈線残存
116	SK91	1層	分銅形土製品	△2.1	△3.3	1.1	—	表面に連続する刺突文。表面赤彩。端部に2個の穿孔
167	SK119	埋土中	紡錘車	4	4.1	0.6	0.5	焼成後、両面から穿孔
242	SB3	P9埋土中	羽口	△9.3	△7.2	3.5	—	ガラス質滓付着。被熱により変形
251	4区遺構外	表土	土製勾玉	△2.0	1	1.3	—	下半欠損。焼成前の穿孔
252	4区遺構外	包含層	分銅形土製品	△5.4	10.1	1.2	—	表面に連続する刺突文。表裏両面赤彩
253	4区遺構外	黒褐色土	分銅形土製品	△9.9	△9.9	1.5	—	表面に連続する刺突文。表裏両面赤彩。端部に9個の穿孔
254	4区遺構外	暗褐色土	分銅形土製品	△4.4	△4.4	1.6	—	表面に2条の沈線と連続する刺突文。表裏両面赤彩。端部に4個の穿孔。
255	4区遺構外	表土	分銅形土製品	△4.6	△4.4	1	—	表面に連続する刺突文。表裏両面赤彩

表11　玉関連遺物観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	法量(cm)				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
J1	SI15	床面	ガラス小玉	0.4	0.4	0.4	0.1	
J2	SI17	2層	ガラス小玉	0.55	0.5	0.45	0.2	気泡の破裂痕有
J3	SI17	埋土中	ガラス小玉	0.55	0.5	0.55	0.2	
J4	SI17	埋土中	ガラス小玉	0.4	0.4	0.3	0.1未満	
J5	SI17	埋土中	ガラス小玉	0.35	0.35	0.25	0.1未満	
J6	SI17	床面	ガラス小玉	0.4	0.3	0.2	0.1未満	
J7	SI18	1層	ガラス勾玉	1.4	1.2	0.5	1.6	
J8	SI18	床面	ガラス小玉	0.4	0.35	0.25	0.1未満	
J9	SI18	床面	ガラス小玉	0.35	0.3	0.35	0.1未満	
J10	SI18	床面	ガラス小玉	0.25	0.25	0.3	0.1未満	
J11	SI18	床面	ガラス小玉	0.3	0.3	0.3	0.1未満	
J12	SI18	床面	ガラス小玉	0.35	0.35	0.25	0.1未満	
J13	SI18	P8埋土中	ガラス小玉	0.35	0.3	0.3	0.1未満	
J14	SI18	P11埋土中	ガラス小玉	0.35	0.3	0.25	0.1未満	
J15	SI26	壁溝埋土	管玉素材	4.15	0.9	0.4	1.4	擦り切り技法による角柱状素材
J16	SI35	埋土中	ガラス小玉	0.4	0.35	0.2	0.1未満	
J17	SI35	4層	ガラス小玉	0.35	0.35	0.4	0.1未満	
J18	SI37	テラス状部分上層	管玉素材	3.7	4.9	2.95	36.2	分割途中か。研磨痕あり
J19	SK106	埋土中	管玉	1.5	0.2	0.2	0.1	緑色凝灰岩製
J20	SI16	床面	勾玉	△2.4	1.6	1.6	5.5	下半欠損。片面穿孔。瑪瑙製
J21	4区遺構外	表土	ガラス小玉	0.4	0.35	0.25	0.1未満	
J22	4区遺構外	攪乱土中	ガラス小玉	0.45	0.45	0.35	0.1	
J23	4区遺構外	表土	管玉素材	1.5	1.4	0.8	2.8	擦り切り技法による角柱状素材
J24	4区遺構外	表土	管玉素材	3.1	0.8	0.95	2.1	擦り切り痕なし

表12　石器観察表（1）

遺物No.	出土位置	層位	器種	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
S1	SI17	床面	砥石	△11.6	△5.3	3.7	290	厚手の砥石
S2	SI17	埋土中	砥石	△16.9	6.0	△2.15	320	節理面で割れている
S3	SI17	埋土中	敲石	△15.5	7.2	5.75	1090	棒状礫の先端に敲打痕
S4	SI17	1層	磨製石斧	△17.1	4.0	1.1	100	器体中央を走る縞をもつ，梅田15号墳出土品と接合
S5	SI18	床面	砥石	△5.2	△3.6	1.1	26	各面使用，使用面は平坦
S6	SI18	2層	砥石	△5.85	△3.0	△2.5	32.2	器体中央部がすぼまるように使い込まれた砥石
S7	SI20	埋土中	砥石	5.95	2.5	1.85	47.4	各面使用，使用面は平坦
S8	SI21	35層	砥石	13.1	7.1	4.75	640	左側面節理面
S9	SI21	18層	砥石	6.2	4.7	4.5	210	各面使用，使用面は平坦
S10	SI21	1層	敲石	11.8	6.7	2.6	310	扁平な楕円礫の先端から側面の一部にかけて敲打痕
S11	SI21	35層	台石	17.6	△18.15	7.4	4290	表面中央に使用痕
S12	SI22	2層	石錘	5.2	△2.9	2.35	33	器体中央に1条の溝を巡らす
S13	SI23	P3埋土中	砥石	6.6	5.3	3.4	150	各面使用，使用面は平坦
S14	SI25	壁溝上面	敲石	7.1	5.8	1.9	120	小型の扁平礫の側面の一部に敲打痕
S15	SI25	埋土中	敲石	9.0	7.0	3.85	310	不整形な棒状礫の一端に敲打痕，反対側の側面に擦痕
S16	SI25	P1埋土中	砥石	6.75	5.6	2.35	120	全面使用の砥石
S17	SI25	3層	砥石	17.3	8.6	2.9	680	表裏を使用
S18	SI26	3層	顔料素材	△3.7	3.4	1.45	29.6	軟質部と硬質部が層状となる
S19	SI28	埋土中	敲石	11.45	5.0	4.3	360	棒状礫の先端と器体中央に敲打痕
S20	SI28	床面	敲石	11.8	5.5	3.55	340	器体表裏の中央付近に敲打痕
S21	SI28	埋土中	敲石	7.25	3.6	3.9	140	棒状礫の両端に敲打痕
S22	SI28	床面	砥石	5.2	3.65	1.55	48.8	全面使用の砥石，使用面は平坦
S23	SI28	埋土中	石鏃	△4.7	2.1	0.25	3.8	片岩系石材
S24	SI31	埋土中	砥石	△5.8	△5.5	1.65	62	全面使用の砥石，使用面は平坦
S25	SI31	埋土中	石鏃	△5.1	2.1	0.5	7.4	片岩系石材
S26	SI35	埋土中(9層以下)	砥石	△5.9	△3.2	1.4	31.4	使用面くぼむ
S27	SI35	2層	石錘	8.7	4.8	4.7	210	楕円形の礫の中央に痕跡的な1条の溝
S28	SI36	埋土中	台石	17.8	21.1	7.0	4090	表面中央に使用痕
S29	SI36	2層	石鏃	△6.3	2.5	0.35	9.5	片岩系石材
S30	SI36	3層	大型石庖丁	△7.5	△10.5	3.6	180	板状の素材の一端に刃部
S31	SI36	3層	敲石	16.9	7.2	5.1	970	棒状礫の両端と器体中央に敲打痕
S32	SI37	埋土中	砥石	13.6	2.8	1.7	120	かなり使い込まれた砥石
S33	SI38	P1埋土中	扁平片刃石斧	5.1	5.0	1.3	64.5	整形のための剥離痕残す
S34	SK100	12層	石錘	7.55	6.55	2.4	140	扁平礫の上下両端を打ち欠く
S35	SK106	埋土中	ナイフ形石器	3.2	1.75	0.8	2.7	二側縁加工の切り出し形，黒曜石製
S36	SI16	床面	伐採石斧	△11.4	6.1	4.2	470	器体中央で折損
S37	SI16	壁溝上面	敲石	8.4	6.4	3.65	320	扁平な円礫の全周と表裏両面に敲打痕
S38	SI16	P4(40層)	敲石	11.9	6.1	3.6	380	棒状礫の両端と側面に敲打痕
S39	SI16	床面	敲石	10.7	7.9	7.25	880	円礫の先端と表裏両面に敲打痕
S40	SI19	床面	石錘	8.25	4.75	5.05	230	楕円礫の中央を巡る1条の溝
S41	SI19	壁際	砥石	7.45	7.15	2.7	110	各面使用，使用面は平坦
S42	SI24	2・4層	敲石	13.45	7.5	5.25	640	棒状礫の先端と側面の一部に敲打痕

表13　石器観察表（2）

遺物No.	出土位置	層位	器種	法量				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
S43	SI24	埋土中	敲石	△12.45	5.55	6.2	560	棒状礫の先端と器体中央付近に敲打痕
S44	SI24	床面	台石	△16.7	△29.1	8.8	6370	被熱痕跡もあり
S45	SI34	1層	鉄滓付着礫	11.45	9.2	3.9	510	扁平な円礫の一部に鉄滓が付着
S46	SK107	埋土下層	砥石	4.15	3.7	2.3	38.6	携帯用
S47	SK107	1層	鉄滓付着礫	5.6	9.8	1.45	110	扁平礫の一部に鉄滓付着
S48	SK107	2層	鉄滓付着礫	9.15	3.9	5.6	180	被熱により破砕
S49	4区遺構外	黄褐色土	石錘	8.5	7.1	6.25	510	瀬戸内型
S50	4区遺構外	表土	石錘	5.9	5.3	1.75	78	小型扁平礫の上下両端を打ち欠く
S51	4区遺構外	黄褐色土	扁平片刃石斧	8.35	6.4	2.1	210	整形のための剥離痕残す
S52	5区遺構外	表土	石庖丁	7.0	4.8	0.6	31.6	使用が進んで再生されたものか
S53	4区遺構外	褐色土	不明製品	2.35	△1.8	0.95	5.6	両面穿孔の環状製品
S54	5区遺構外	表土	剥片	△9.5	2.3	1.2	21.4	使用痕のある縦長剥片。黒曜石製
S55	4区遺構外	黄褐色土	ナイフ形石器	5.6	2.5	1.1	11.4	二側縁加工の切り出し形。黒曜石製
S56	4区遺構外	暗褐色土	石鏃	△2.6	△1.8	0.3	1.7	片岩系石材

表14　鉄器観察表

遺物No.	出土位置	層位	種類	法量				備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	
F1	SI23	P5(3層)	棒状鉄器	△19	7	4	0.9	一方の端部を欠く。小型紡錘形
F2	SI25	P5上層	棒状鉄器	43	9	7	4.7	両端尖る。断面方形
F3	SI25	P5上層	板状鉄器	△23	15	6	3.2	茎部か
F4	SI26	1～2層	板状鉄器	△34	26	4	10.6	一方の端部を欠く
F5	SI26	底面付近	ヤリガンナ	△34	15	4	4.9	刃部やや湾曲
F6	SI28	床面	板状鉄器	△14	12	2	0.7	バチ形に開く板状品
F7	SI37	壁溝上面	ヤリガンナ？	△28	20	3	5.1	先端折り曲がる
F8	SK115	底面	袋状ノミ？	△32	△17	△14	4.8	袋部と思われる。
F9	SK119	埋土中	不明製品	△43	△39	△18	33.2	片刃
F10	SI16	3層	長頭鏃？	△67	54	37	6.1	両端を欠く
F11	SI24	埋土中	棒状鉄器	△41	7	2	1.1	ほぼ全体に縦方向の木質残る
F12	SK107	埋土中	刀子？	△45	23	2	7.5	刃部破片。先端欠く
F13	SK107	埋土中	刀子？	△41	23	5	8.7	刃部か
F14	SK107	埋土下層	刀子	△74	23	5	20.2	茎部から刃部。刃部湾曲
F15	鍛冶炉2	2層上面	楕形鍛冶滓	111	130	35	490	下面に炉床土が固着する。

表15　SI・SB主柱穴一覧表

遺構名	番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	特記事項
SI14	P4	0.24	0.24	0.2	
	P8	0.2	0.16	0.29	
	P9	0.2	0.16	0.21	
SI15	P1	0.38	0.32	0.42	柱痕跡あり
	P2	0.4	0.34	0.54	柱痕跡あり
	P3	0.36	0.32	0.6	柱痕跡あり
	P4	0.36	0.34	0.6	
SI17	P1	0.34	0.32	0.46	柱痕跡あり
	P2	0.42	0.4	0.54	柱痕跡あり
	P3	0.42	0.42	0.52	柱痕跡あり
	P4	0.4	0.36	0.6	柱痕跡あり
SI18	P1	0.5	0.44	0.72	
	P2	0.48	0.38	0.58	
	P3	0.5	0.46	0.6	
	P4	0.9	0.5	0.74	
SI20	P1	0.34	0.29	0.27	
	P2	0.61	0.38	0.3	
	P4	0.27	0.22	0.29	
SI21	P1	0.38	0.32	0.66	
	P2	0.35	0.34	0.65	
	P3	0.32	0.3	0.55	
	P4	0.39	0.36	0.62	柱痕跡?
SI22	P1	0.42	0.38	0.59	
	P2	0.38	0.34	0.29	
	P3	0.62	0.48	0.57	
SI23	P1	0.5	0.4	0.72	
	P2	0.76	0.56	0.8	柱痕跡あり
	P3	0.6	0.42	0.58	柱痕跡あり
	P4	0.68	0.46	0.56	柱痕跡あり
	P6	0.38	0.32	0.34	柱痕跡あり
	P7	0.32	0.28	0.34	柱痕跡あり
SI25	P1	0.54	0.5	0.68	柱痕跡あり
	P2	0.3	0.26	0.48	
	P3	0.44	0.4	0.48	柱痕跡あり
	P4	0.4	0.34	0.58	柱痕跡あり
	P6	0.5	0.46	0.5	柱痕跡あり
SI26	P1	0.66	0.56	0.8	
	P2	0.7	0.56	0.6	
	P3	0.4	0.4	0.5	
	P4	0.42	0.4	0.44	
	P5	0.66	0.54	0.54	
	P6	0.6	0.56	0.8	
SI28a	P1	0.3	0.28	0.46	
	P2	0.36	0.34	0.32	
	P3	0.42	0.4	0.24	
	P4	0.44	0.4	0.72	
SI28b	P9	0.52	0.49	0.38	柱痕跡あり
	P10	0.63	0.54	0.34	柱痕跡あり
	P11	0.68	0.64	0.54	柱痕跡あり
	P12	0.6	0.54	0.36	
	P13	0.62	0.56	0.44	
SI31	P1	0.66	0.54	0.54	
	P2	0.66	0.49	0.72	柱痕跡あり
	P3	0.71	0.63	0.72	柱痕跡あり
	P4	0.58	0.45	0.69	柱痕跡あり
	P5	0.68	0.58	0.74	柱痕跡あり
SI33	P1	0.3	0.3	0.06	
	P2	0.4	0.28	0.14	
	P3	0.38	0.38	0.23	
	P4	0.6	0.4	0.1	
	P5	0.4	0.26	0.12	
	P6	0.5	0.38	0.12	
SI35a	P10	0.3	0.3	0.56	
	P12	0.22	0.2	0.5	

遺構名	番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	特記事項
SI35b	P1	0.68	0.56	0.68	柱痕跡あり
	P2	0.58	0.54	0.62	柱痕跡あり
	P3	0.8	0.64	0.68	
	P4	0.56	0.58	0.5	
	P5	0.5	0.48	0.8	柱痕跡あり
	P6	0.9	0.8	0.8	柱痕跡あり
	P7	0.3	0.3	0.6	柱痕跡あり
	P9	0.3	0.25	0.45	柱痕跡あり
SI36	P1	0.54	0.5	0.68	柱痕跡あり
	P2	0.52	0.46	0.7	柱痕跡あり
	P3	0.6	0.56	0.58	柱痕跡あり
	P4	0.45	0.4	0.58	柱痕跡あり
SI37	P1	0.66	0.58	0.97	柱痕跡あり
	P2	0.74	0.58	0.87	柱痕跡あり
	P3	0.43	0.38	0.44	柱痕跡あり
	P4	0.4	0.3	0.71	
	P5	0.75	0.62	0.8	柱痕跡あり
	P6	0.75	0.5	0.4	
	P7	0.7	0.54	0.74	柱痕跡あり
SI38	P1	0.5	0.5	0.72	
	P2	0.3	0.3	0.65	柱痕跡あり SI32のP1的
	P3	0.32	0.3	0.84	SI32のP4
	P4	0.3	0.3	0.78	
SI16	P1	0.4	0.3	0.64	
	P2	0.7	0.6	0.7	
	P3	0.54	0.44	0.92	柱痕跡あり
	P5	0.64	0.6	0.7	柱痕跡あり
	P6	0.44	0.4	0.56	柱痕跡あり
SI19	P1	0.34	0.28	0.56	柱痕跡あり
	P2	0.34	0.28	0.66	柱痕跡あり
SI24	P1	0.4	0.36	0.6	
	P2	0.36	0.34	0.56	柱痕跡あり
	P3	0.3	0.26	0.54	柱痕跡あり
	P4	0.64	0.56	0.56	
SI34	P1	0.36	0.32	0.36	
	P2	0.32	0.32	0.6	
SI39	P1	0.44	0.44	0.56	
	P2	0.54	0.42	0.52	
	P3	0.62	0.48	0.56	
	P4	0.72	0.42	0.62	
SI30	P1	0.6	0.52	0.34	
	P2	0.48	0.4	0.67	
	P3	0.28	0.18	0.1	
SI32	P1	0.5	0.42	0.2	
	P2	0.4	0.34	0.27	
	P3	0.52	0.45	0.14	
	P4	0.3	0.28	0.08	
SI13	P1	0.76	0.62	0.5	
	P2	0.66	0.5	0.67	
	P3	0.54	0.5	0.48	
	P4	0.58	0.48	0.48	
	P5	0.64	0.52	0.65	
	P6	0.57	0.47	0.5	
	P7	0.6	0.6	0.42	
	P8	0.7	0.68	0.5	
	P9	0.6	0.54	0.47	
	P10	0.5	0.4	0.35	
SI04	P1	0.57	0.53	0.43	
	P2	0.57	0.47	0.3	
	P3	0.55	0.55	0.27	
	P4	0.75	0.53	0.3	
	P5	0.6	0.49	0.43	
	P6	0.58	0.52	0.4	
	P7	0.51	0.4	0.53	柱痕跡あり
	P8	0.52	0.5	0.43	

表16　ピット一覧表

ピット番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
P199	L30	80	59	56
P200	G33	45	38	58
P201	F33	52	40	14
P202	F33	46	30	11
P203	F33	58	38	30
P204	F32	48	32	32
P205	F32	30	26	24
P206	F32	48	40	14
P207	G32	53	43	6
P208	E31	36	30	26
P209	E31	30	26	22
P210	E31	40	34	31
P211	E31	34	30	7
P212	I20	25	23	30
P213	E30	52	41	17
P214	E30	38	35	13
P215	E30	35	27	27
P216	F30	25	18	21

ピット番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
P217	F30	28	27	16
P218	F30	35	30	14
P219	H20	21	21	27
P220	E29	39	38	48
P221	E29	40	33	35
P222	E29	39	29	40
P223	E29	54	40	46
P224	E29	45	40	46
P225	E29	26	24	25
P226	E28	40	37	32
P227	E28	38	35	58
P228	E28	35	30	40
P229	E28	46	38	30
P230	E28	42	40	13
P231	F32	38	28	15
P232	G29	60	54	55
P233	G30	59	57	37

第4章　自然科学分析の成果

第1節　梅田萱峯遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

1．はじめに

梅田萱峯遺跡は、東伯郡琴浦町梅田ほかに所在する遺跡である。調査では、弥生時代中期後葉～後期中葉あるいは古墳時代前期～中期の竪穴住居跡などが検出された。ここでは、このうち弥生時代後期中葉の竪穴住居跡と弥生時代中期後葉の土坑から出土した炭化材について樹種同定を行い、樹種の利用状況を検討した。

2．試料と方法

試料は、弥生時代後期中葉の竪穴住居跡(SI20)から出土した炭化材３試料と弥生時代中期後葉の土坑(SK100)から出土した炭化材１試料である(表17)。

これら炭化材は、３断面(横断面・接線断面・放射断面)を5㎜角以下の大きさに整え、直径1㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分に乾燥させた。さらに、伝導性ペースト(銀)を塗布した後、金蒸着した。観察および同定は、走査電子顕微鏡(日本電子㈱製　JSM-5900LV型)を使用し、写真撮影を行った。

3．結果および考察

炭化材の樹種を検討した結果、弥生時代後期中葉の竪穴住居跡(SI20)から出土した炭化材は、常緑広葉樹のシイノキ属とアカガシ亜属であった。これらの炭化材は、壁際あるいはこれに近い場所から出土した比較的大型の炭化材であることから、建築部材の一部と考えられる。

一方、弥生時代中期後葉の土坑(SK100)から出土した炭化材は、常緑広葉樹のアカガシ亜属であった。

表17　炭化材試料とその樹種

試料№	取上№	遺構名	時期	樹種	備考
1	2458	SI20	弥生時代後期中葉	シイノキ属	芯去りみかん割り
2	2472			アカガシ亜属	
3	2476			アカガシ亜属	
4	7650	SK100	弥生時代中期後葉	アカガシ亜属	板状

4．樹種記載

(1)シイノキ属　Castanopsis　ブナ科　写真6　1a－1c(試料№1)

中型の管孔が単独で間隔をあけて配列し、さらに数個が放射方向に分布し、小型の道管が火炎状に分布する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性である。

シイノキ属の樹木は、暖帯に生育する常緑広葉樹で照葉樹林の主要素である。関東以西・四国・九

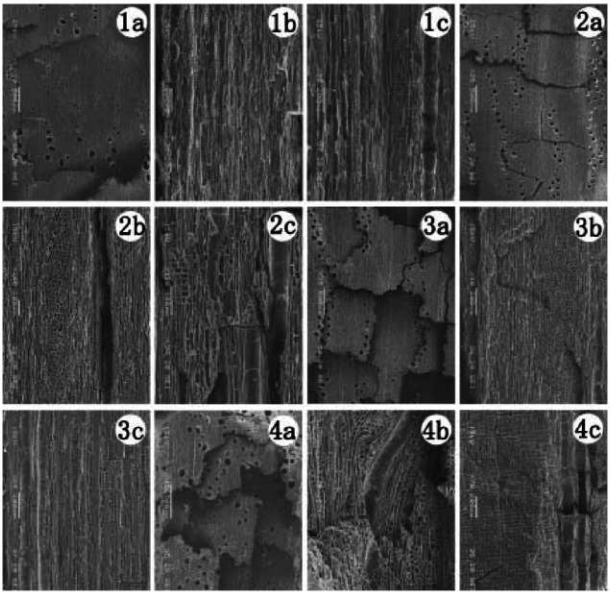


写真6　出土炭化材の走査型顕微鏡写真（a：横断面，b：接線断面，c：放射断面）
1a－1c．シイノキ属（試料№1）　2a－2c．アカガシ亜属（試料№2）
3a－3c．アカガシ亜属（試料№3）　4a－4c.アカガシ亜属（試料№4）

州に分布するツブラジイと、本州の福島県と新潟県佐渡以南・四国・九州に分布するスダジイがある。

(2)コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　写真6　2a－2c(試料№2)、3a－3c(試料№3)、4a－4c(試料№4)

小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材である。接線状の柔組織が顕著である。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列のものと集合放射組織とがある。

アカガシ亜属は、常緑でドングリをつけるカシ類の仲間であり、主に暖温帯に分布するアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具として用いられる代表樹種である。

第5章　総　括

第1節　梅田萱峯遺跡の集落構造と変遷

平成17年度から発掘調査を行っている梅田萱峯遺跡は、丘陵のかなりの部分の調査を行い、旧石器時代から奈良時代までの遺構、遺物を確認した。未調査の部分を残すとはいえ、当時の集落構造や変遷がかなり明らかとなったと考えており、各時代ごとに現時点でのまとめを行っておく。

旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺物としては、１区尾根部と４区谷部付近から３点のナイフ形石器が出土している。縄文時代に関しては、１区の尾根部から谷部にかけて早期と晩期の土器が出土している。これらは散発的な出土で、当時の集落像を知る手がかりとはならないが、梅田萱峯遺跡には早くから人々の活動があったことがわかる。なお、３区から４区東尾根を中心に、落とし穴と呼べる形態の土坑が多数見つかっている。これらを縄文時代の遺構とする積極的な根拠はないが、仮にこの時期のものであるとすれば、この丘陵尾根部が狩猟の場となっていたものと思われる。

弥生時代前期～中期中葉

この時期の遺構は検出されておらず、１区の尾根部で前期後葉（Ⅰ－3期）の土器が、谷部で中期中葉（Ⅲ期）の土器が、それぞれやや集中して見つかっているにすぎない。

弥生時代中期後葉（第149図）

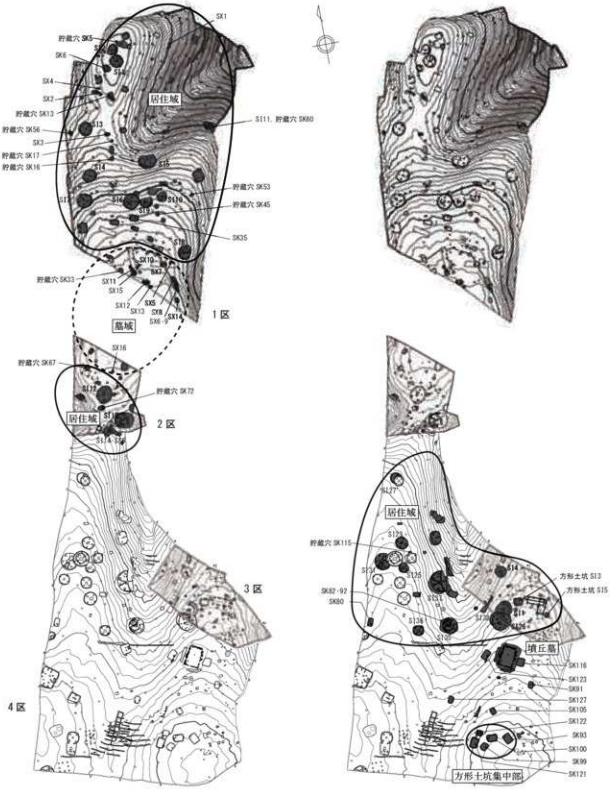
丘陵上に集落としての姿を突如として現す段階である。

Ⅳ－1期の遺構は１区から２区を中心に、一部４区北端に築かれる。竪穴住居14棟をはじめとして、段状遺構５基、方形土坑２基、貯蔵穴９基、墓16基などが築かれている。竪穴住居の位置関係などから、いくつかのグループに分けられ、10棟程度の建物が同時並存していたと思われる。

Ⅳ－2からⅣ－3期の遺構は３区と４区に認められ、Ⅳ－1期から集落が丘陵の南へ移動したことを示している。竪穴住居12棟をはじめ、段状遺構５基、方形土坑14基、貯蔵穴６基のほか、４区東尾根に墳丘墓が築かれる。１区南側の墓域はⅣ－2期までは木棺墓等が築かれていたようである。この段階も竪穴住居の位置関係などからいくつかのグループに分けられ、その他の遺構の配置にも興味深い点が認められる。

弥生時代後期前葉～中葉（第150図）

この時期は４区西尾根北側付近にのみ遺構が確認されている。後期前葉（Ⅴ－1期）は竪穴住居が５棟と、中期後葉からすると半減している。その５棟も、近接するSI28、15、17、18と、その北に単独で築かれるSI21のふたつのグループに大別できる。近接する４棟の住居は、それぞれの間隔から３棟程度が同時並存していたと思われ、この時期には４棟程度の竪穴住居が建っていたものと考えられる。



弥生時代中期後葉（Ⅳ-1 期）　　弥生時代中期後葉（Ⅳ-2 ～ 3 期）

0　50m

第149図　梅田萱峯遺跡遺構変遷図(1)

第150図　梅田萱峯遺跡遺構変遷図(2)

出土遺物も特徴的で、SI28を除いてガラス製品が見られた。ガラス勾玉はSI18の埋土上層からであったが、ガラス小玉の多くは住居床面から出土している。またSI17、18出土土器には胎土等から見て在地の土器ではないものが含まれる。

後期中葉（Ⅴ－2期）になると、西尾根の調査区境で竪穴住居SI20が１棟確認されたにすぎない。後期後葉（Ⅴ－3期）に至ると遺構は認められなくなる。

古墳時代前期中葉～中期中葉（第150図）

前期中葉（天神Ⅲ期）に４区西尾根北側に竪穴住居SI24が１棟築かれた後、中期前葉（天神Ⅴ期）に同じ尾根の南側に竪穴住居SI39が単独で築かれる。続いて中期中葉（天神Ⅵ期）にSI39のやや北に３棟の竪穴住居が出現する。床面積約54㎡と大型のSI16を中心に、尾根平坦部にSI34が、谷に向かう斜面にSI19がそれぞれ配置され、これらは住居間の距離からして同時並存していた可能性がある。

奈良時代（第150図）

今のところ梅田萱峯遺跡において、古代集落として最後の段階である。

４区西尾根南側の調査区境付近に竪穴住居SI32のほかに、工房と考えられる建物SB3、4、廃棄土坑SK107等で構成される鍛冶関連遺構が認められる。工房と考えられる建物と竪穴住居は、同時並存するには距離が近いように思われる。SK107は埋土に炭化物や焼土が堆積しているが、鍛冶に伴う遺物と考えられる鉄滓付着礫は埋土上層から出土している。焼失住居であるSI32の廃材などをSK107に廃棄した後に鍛冶工房が設けられたとも考えられ、これ以降の居住域は未調査地を含む周辺に移動した可能性がある。

鍛冶関連遺物については検討ができておらず、操業規模やその内容を明らかにしえないが、鍛冶関連遺構や、廃滓場と思われる谷から出土した鉄滓は概して小さいものが多く、現時点では集落内で使用する鉄器の製作や修繕といった村方鍛冶であったのではないかと想像している。

以上、時期ごとの様相を概観した。こうしてみると集落規模が最も大きく、その内容も前後の時期に比べ多彩なのは弥生時代中期後葉（Ⅳ－1期とⅣ－2からⅣ－3期）である。梅田萱峯遺跡の画期といえるこの時期について、次節で改めて検討してみる。

第2節　梅田萱峯遺跡の弥生時代中期後葉の集落像と構造変化

前節で概観したⅣ－1期とⅣ－2からⅣ－3期の集落像についてさらに検討し、集落構造の変化等にふれる。

Ⅳ－1期（第149図）

この時期の遺構が配置されるのはおもに１区から２区である。ここは広域農道に分断される標高58～59m付近を最高位として、南北及び西には緩やかに、東には谷に向かいきつく傾斜する地形となっている。１区北側先端部に至る間には浅い鞍部があり、２区南端部にも同様の地形が見られる。

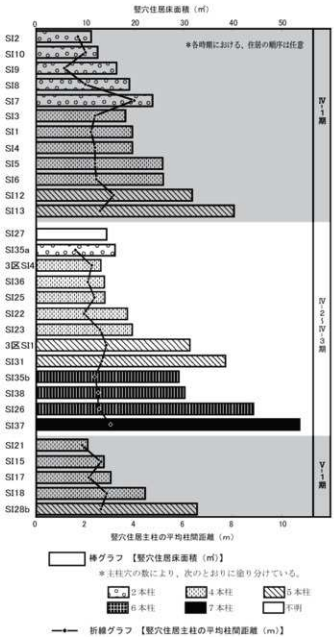
遺構配置は墓域を挟んで南北に居住域を設けている。竪穴住居の距離関係から、居住域内には10棟

程度が同時並存していたと推定される[注11]。これらの竪穴住居は２～３棟からなる居住単位[注12]にまとめられるようで、居住域で多数検出されたフラスコ状の掘り込みを持つ貯蔵穴が、それぞれの居住単位に伴っていたと思われる。

竪穴住居等の床面積を見てみると、SI12が31.8㎡、SI13が40.3㎡で大型、SI7が23.7㎡、SI5が25.8㎡、SI6が25.9㎡で中型、それ以外は20㎡に近いものもあるが小型と整理できる[注13]。大型のSI12、SI13は墓域の南側にあり、中型のSI5、SI6、SI7は墓域の北側に、小型は中型の周縁に配置されている。

各住居等の出土遺物からは、それぞれの優位性、特異性は指摘できない。

Ⅳ－1期の集落は墓域をはさんだ南北に居住単位が存在し、10棟程度の竪穴住居等が貯蔵穴を伴いながら展開していたと考えられる。



第151図　竪穴住居の床面積と主柱穴

Ⅳ－2からⅣ－3期（第149図）

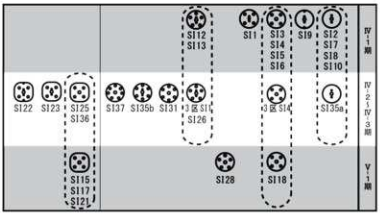
この時期の遺構は３区から４区にかけて見られ、Ⅳ－1期の集落域と基本的に重複しないのが特徴である。両者の分布域を分けるのは２区南端から４区北端にかけての鞍部である。ここから南に広がる４区西尾根と３区及びそこから続く４区東尾根、両者の間に介在する谷がⅣ－2からⅣ－3期の遺構分布域となる。

遺構配置は、墳丘墓が東尾根緩斜面に築造され、竪穴住居はそこから北の、谷を臨む斜面を中心に築かれている。竪穴住居の位置関係からは西尾根と東尾根の２群に大別でき、居住単位を明確にすることは難しいが、竪穴住居間の距離からすれば８棟程度が同時並存していたと考えられる。

Ⅳ－1期では各居住単位に竪穴住居と貯蔵穴がセット関係を有すると想定したが、３区から４区にかけて検出された貯蔵穴は竪穴住居が築かれない東尾根東側斜面を中心に分布し、セット関係を有しない。

竪穴住居等の床面積は、SI37が推定53.7㎡で超大型、SI31が推定38.6㎡、SI26が推定44.3㎡、SI38が推定30.3㎡、3区SI1が推定31.3㎡で大型、SI35が29.1㎡で中型、その他は小型となる。SI37とい

う超大型が現れること、中型としたSI35も限りなく大型に近く、傾向として大型以上と小型以下に大きさが分かれることが特徴で、Ⅳ－1期よりも鮮明に建物規模にはっきりと格差が現れる。梅田萱峯遺跡の竪穴住居をⅣ－1期からⅤ－1期（後期前葉）まで分類したのが第151図で、Ⅳ－1期とⅣ－2からⅣ－3期を比べると、後者の住居に床面積が大きいものが増える傾向が読み取れる。また主柱穴の数も増えていったことが分かるが、これは折れ線グラフで示したように主柱間距離に変化がないため、必然的に床面積を広げるためには主柱を増やさざるを得なかったためであろう。Ⅴ－1期には床面積の小さな住居が主体となる。竪穴住居の平面形態では隅丸方形プランがⅣ－2からⅣ－3期に出現し、Ⅴ－1期に続いている（第152図）。



第152図　竪穴住居の平面形態

超大型のSI37は谷に向かう斜面にあり、大型のSI31とSI26等はその東西尾根上に、中型のSI35はSI37の南に築かれている。小型住居はこれらの周縁に配置されており、SI37を中心とした建物配置となっている。SI37は建物規模もさることながら、壁際に小ピット列を有するなど建物の構造も特異性を有している。

立地から分けた東西２群の出土遺物を見ると、東尾根における祭祀色の強さが指摘できる。SI26、３区SI1、SI4はいずれも分銅形土製品を所有していた。さらにSI26出土土器と墳丘墓の主体部を囲む柱穴出土土器が接合している。東尾根における遺構群の性格については、方形土坑の検討も併せて位置づけを行いたいが、集落内での祭祀を担う空間であった可能性が高い。SI26、SI38、３区SI1が同じ場所で建て替え続けられたのも、必要性があってのことであろう。

Ⅳ－1期では２基のみであった方形土坑が、Ⅳ－2からⅣ－3期では15基と増加する。Ⅳ－1期では竪穴住居に近接して築かれ、前述した居住単位に方形土坑も帰属していたと考えられるが、Ⅳ－2からⅣ－3期での分布を見ると竪穴住居の周縁に配置されていることが分かる。とくに大型で深さも深く、しっかりした主柱穴をもつ一群が東尾根南側の地形的にも最高位付近に集中して築かれており、他の方形土坑とは位置づけが異なっていた可能性が高い。方形土坑の個別的な検討は次節に譲るが、Ⅳ－1期では居住単位に属していた方形土坑が、Ⅳ－2からⅣ－3期では居住単位を離れて集落を構成する集団に属していたものと考えたい。

以上のように、梅田萱峯遺跡においてはⅣ－1期とⅣ－2からⅣ－3期では、集落の移動があったばかりではなく、超大型住居を中心とした建物配置が行われていること、東尾根が祭祀空間として位置づけられていることなど、集落構造にも変化が見られる。こうした変化が墳丘墓築造の背景にもなったであろうし、弥生時代が中期から後期に移り変わる前夜の、社会的な動きを反映している可能性がある。

第3節　方形土坑の性格と位置づけ

今回の調査では長軸3～4m、短軸2～3m程度で、平面形態が整った方形を呈する土坑が多数見つかった。これらは規模や構造に一定の規格性があり、前述のように集落内での配置状況から、機能的にも他の土坑とは区別されるものと考えられる。こうしたものを方形土坑と呼び、その構造からいくつかに分類したうえで、他の集落遺跡の例も参考にしながら、梅田萱峯遺跡における方形土坑の位置づけをさらに検討したい。

方形土坑の分類

ここで方形土坑と呼ぶものは、管見の限りでは弥生時代中期後葉から古墳時代前期前葉にかけて認められる[23・24]。

分類に当たっては梅田萱峯遺跡以外に、同じ琴浦町内にある笠見第3遺跡での検出例も加えた。まずは壁溝の有無でⅠ類とⅡ類に大別し、主柱穴やピットの状況から細分した(第153図、表18)。

Ⅰ類　壁溝を有するもの

Ⅰ－１類　主柱穴を持つもの[25]

Ⅰ－１ａ類　短軸方向の壁の中央に相対する２個一対の主柱穴を持つもの。
主柱穴のみ有するSK100、121と、それ以外のピットを伴うSK93、99がある

Ⅰ－１ｂ類　主柱穴が短軸方向ではなく、長軸方向の壁に設けられるもの。一辺にのみ２個の主柱穴を持つ、笠見第3遺跡SK1しか確認していない

Ⅰ－２類　主柱穴を持たないが、その他のピットは伴うもの　SK6、35、80、82、91、92、105、122、127、3区SI3

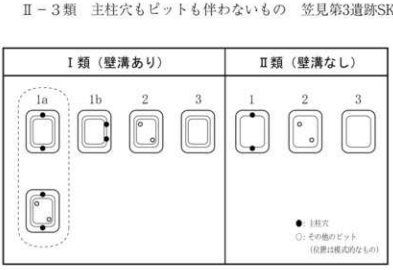
Ⅰ－３類　主柱穴もピットも伴わないもの　SK123

Ⅱ類　壁溝を有しないもの

Ⅱ－１類　短軸方向の壁に相対する２個一対の主柱穴を持つもの　笠見第3遺跡SK35、70

Ⅱ－２類　主柱穴を持たないが、その他のピットは伴うもの　３区SI5

Ⅱ－３類　主柱穴もピットも伴わないもの　笠見第3遺跡SK65



第153図　方形土坑分類模式図

梅田萱峯遺跡の方形土坑について、これらの類型と平面規模の関係を見ると、主柱穴を持つⅠ－１類は４基のうち３基(SK93、100、121)が長軸4m、短軸3mを超え、底面の面積も10㎡前後と大型である。深さについても、SK93は30cmと浅めだが、SK100、121は45～55cmと深く、やや小型のSK99も45cmと同規模

表18　梅田萱峯遺跡の方形土坑一覧表

地点	遺構名	時期	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	底面積(㎡)	壁溝	主柱穴	その他ピット	被熱面	類型	特記事項
1区	SK6	Ⅳ－1	2.8	1.8	0.21	3.3	○	×	○	○	Ⅰ－2	
	SK35	Ⅳ－1	3.5	2.5	0.32	5.5	○	×	○	×	Ⅰ－2	
3区	SI3	Ⅳ－2～3	3.8	3.4	0.4	6.6	○	×	○	×	Ⅰ－2	
	SI5	Ⅳ－2～3	2	1.6	0.2	2.6	×	×	○	○	Ⅱ－2	
4区	SK80	Ⅳ－2～3	3.5	2.2	0.5	5	○	×	○	×	Ⅰ－2	
	SK82	Ⅳ－2～3	△2.9	△2.15		5.2	○	×	○	×	Ⅰ－2	
	SK92a	Ⅳ－2～3	△1.95	△1.4		2.3	○	×	×	×	Ⅰ－3	
	SK92b	Ⅳ－2～3	△2.95	△1.7		4.3	○	×	○	×	Ⅰ－2	
	SK91	Ⅳ－2～3	3	2.2	0.18	4.8	○	×	○	×	Ⅰ－2	分銅形土製品出土
	SK93	Ⅳ－2～3	4.1	3.2	0.3	10.2	○	2個1対	○	×	Ⅰ－1a	
	SK99	Ⅳ－2～3	3.4	2.9	0.45	6.4	○	2個1対	○	×	Ⅰ－1a	
	SK100	Ⅳ－2～3	4.6	3	0.45	9.7	○	2個1対	×	×	Ⅰ－1a	炭化材出土
	SK105	Ⅳ－2～3	3	2.3	0.2	4.9	○	×	○	×	Ⅰ－2	炭化材出土
	SK121	Ⅳ－2～3	4.5	3.3	0.55	10	○	2個1対	×	×	Ⅰ－1a	絵画土器出土
	SK122	Ⅳ－2～3	2.8	2.4	0.4	4.4	○	×	×	×	Ⅰ－2	
	SK123	Ⅳ－2～3	4.2	2.8	0.2	9.1	○	×	×	×	Ⅰ－3	
	SK127	Ⅳ－2～3	3.1	2.4	0.5	4.9	○	×	○	×	Ⅰ－2	

の深さを持つ。主柱穴を持たないⅠ－２、３類は底面の面積は2.5～9㎡とばらつきがあり、深さも40㎝以上（SK80、122、127、3区SI3）のものと、おおむね30㎝以下のものがあり一定ではない。主柱穴を持つ方形土坑は平面規模や深さが大きいだけでなく、主柱穴を持たないものより規格性を有しているといえよう。

出土部材による上屋構造の復元

こうした方形土坑の上屋構造はどのようなものであっただろうか。参考となるのは平成元年に発掘調査が行われた越敷山遺跡群（西伯郡南部町、伯耆町）で検出された3c区SI08である。長軸3.0m、短軸2.5m、深さは最大で1.0mを測り、底面の面積が5.7㎡のⅠ－１ａ類に該当する方形土坑である。埋土中には焼土が厚く堆積していたほか、炭化材が長軸に直交して「床と壁によりかかって」出土している（第154図）。この炭化材は出土状況から垂木であったと思われる。SI08の短軸方向の壁際には深さが55～70㎝

第154図　炭化材が出土した方形土坑

の主柱穴が２個一対で設けてある。断面図を見る限りここに据えられた主柱はほぼ直立していたと想定され、垂木を支える棟木が主柱の上に架けられていたと考えられる。長軸側の外側に設けられたピットを補助的な支柱と見れば、さらに複雑な構造であった可能性もある。

梅田萱峯遺跡でもⅠ－１ａ類のSK100から炭化材が出土している（第62図）。残存範囲で長さ55cm、幅10cm、厚さ1.0cm程度のアカガシ亜属を用いたもので、土坑南西壁から中心に向かい倒れたような状況である。土坑の内外に主柱穴以外のピットはないが、越敷山例と同様な上屋構造をもっていた可能性がある。このほかにSK105でも炭化材が出土している。遺存状況はよくなかったが、土坑の東壁から中心に向かい、長軸と直行する方向に倒れたものと考えられる。SK105はⅠ－２類と分類した方形土坑である。主柱穴と呼べるものがなくても、方形土坑の内外にピットが存在するものは、より簡易なものであったかどうかは別として、Ⅰ－１類同様に上屋構造を有していた可能性がある。

遺構配置や出土遺物から見た方形土坑の機能

前節でふれたように、梅田萱峯遺跡ではⅣ－1期には竪穴住居に近接して築かれ、居住単位に帰属していたと考えられる方形土坑が、Ⅳ－2からⅣ－3期では竪穴住居等の周縁に配置され、居住単位から離れたものになり、東尾根南側に集中して築かれたⅠ－１ａ類と併せて、集落を構成する集団に属するようになったと考えられる。こうしたあり方が普遍的なものか、近隣地域における方形土坑を伴う集落遺跡の様相を弥生時代後期も含めていくつか概観してみたい[216]。

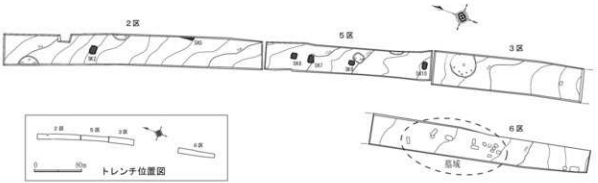
退休寺遺跡

西伯郡大山町住吉に所在する。平成14～15年度に発掘調査が行われ、標高70～76mの尾根平坦部に築かれた、弥生時代中期後葉から後期後葉の集落遺跡であることが判明した。弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3期）の遺構は竪穴住居５棟、方形土坑６基、木棺墓、土壙墓15基が見つかっている（第155図）。墓域と居住域は約80m隔てて設けられている。方形土坑は南からⅡ－２類が１基、Ⅱ－３類が３基、Ⅰ－３類が２基と、タイプごとに並んでいるように見える。平面規模は長軸2.0m、短軸1.5m、深さ30cm程度と規格的である。狭長な調査区でもあり明らかではないが、位置的には竪穴住居から隔絶しているわけではなく、Ⅰ－１類が見られないほか、平面形態や規模が等質的であることも含め、退休寺遺跡の方形土坑は梅田萱峯遺跡のⅣ－1期集落と同じように居住単位に帰属していたのではないだろうか。

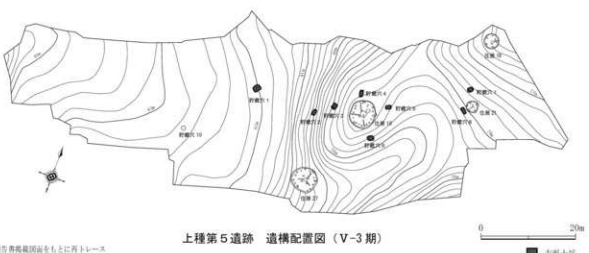
笠見第3遺跡

梅田萱峯遺跡と同じ琴浦町内に所在する。平成14～15年度と18年度に発掘調査が行われ、弥生時代中期後葉から古墳時代後期中葉にかけての集落遺跡と判明した。この間に築かれた竪穴住居は200棟に及び、とくに弥生時代後期に多い。

弥生時代中期後葉（Ⅳ－3期）の集落は尾根の平坦部から緩斜面にかけて竪穴住居が築かれ、その周縁に方形土坑が配置されている（第156図）。このうちⅠ－１ａ類は調査区南西の谷頭を囲む付近にやや散漫ながらまとまっている。平面規模は長軸3m、短軸2m前後と梅田萱峯遺跡のⅠ－１ａ類方形土坑よりひと回り小さいが、梅田萱峯遺跡と同時期に同じ方形土坑の配置状況が見られるのは注目してよい。



退休寺遺跡　遺構配置図（Ⅳ-2～Ⅳ-3期）



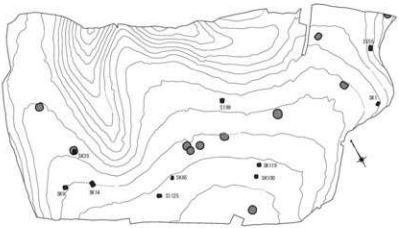
上種第５遺跡　遺構配置図（Ⅴ-3期）

＊報告書掲載図面をもとに再トレース
＊遺構名は報告時のものを示す

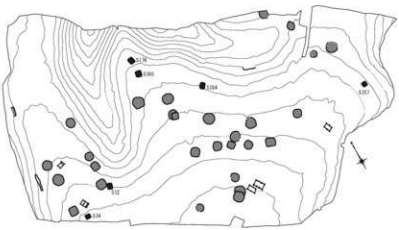
第155図　弥生集落における方形土坑の配置(1)

Ⅰ－１ａ類のうちの２基(SI125、D区SK35)は埋め戻された後、壁溝のみのⅠ－３類に作り直されている。またD区SK14は出土した多量の土器の多くに煤の付着や二次的な被熱が認められることから、近接する廃棄土坑SK20出土の多数の手づくね小粘土塊とともに「集落における共同炊餐」行為が推測されている。

笠見第3遺跡では弥生時代後期後葉(Ⅴ－3期)の集落にも方形土坑が伴う。この時期は集落の最盛期と位置づけられており、竪穴住居は尾根の平坦部から緩斜面にかけて多数築かれている。方形土坑は南西谷頭付近、中央の尾根の先端付近、東尾根東側斜面に限定的に配置されている(第156図)。Ⅰ－１ａ類が東尾根を除いた２ヶ所に１基ずつあり、東尾根には長軸壁に主柱穴を持つⅠ－１ｂ類が存在する。Ⅴ－3期の方形土坑は、竪穴住居の周縁に点在していたⅣ－3期とは異なり、いくつかの地点にまとめ置かれたように見える。逆に主柱穴を持つⅠ－１類は１ヶ所に集中せず、それぞれの地点に１基ずつ分散したように見える。ただこれはあくまで見かけ上のことであって、散漫な形で集落周縁に分布していた方形土坑が居住単位の再編に伴いコンパクトに整理され、居住単位との新たなセット関係が尾根上に複数現れた結果と解釈できるかもしれない[注27]。



弥生時代中期後葉（Ⅳ-3 期）



弥生時代後期後葉（Ⅴ-3 期）

0　50m

笠見第３遺跡　遺構配置図

＊報告書掲載図面をもとに再トレース
＊遺構名は報告時のものを示す

第156図　弥生集落における方形土坑の配置(2)

上種第5遺跡

東伯郡北栄町に所在する。弥生時代後期後葉(Ⅴ－3期)から古墳時代前期にかけての集落遺跡である。西から東にかけて緩やかに傾斜した地形が途中で傾斜を強めており、方形土坑が属するⅤ－3期の集落は傾斜変換点より東を中心に築かれている(第155図)。竪穴住居４棟とフラスコ状の貯蔵穴１基が伴う。方形土坑８基のうち５基(貯蔵穴2～6)が竪穴住居跡18号を囲むように配置されている。また離れて位置する２基の方形土坑(貯蔵穴1、7)も、この住居を中心に東西それぞれ40mと等間隔に築かれている。竪穴住居跡18号は径9.89m、床面積76.78㎡と超大型で、床面から碧玉製の勾玉が出土したという。この南側25mには径10.6m、床面積88.2㎡と、これまた超大型住居(竪穴住居跡27号)が存在する。方形土坑は６基がⅠ－１ａ類で、特定の住居を中心とした配置が見られるのは、管見ではこの一例のみである。

方形土坑を伴う集落を網羅的に検討したわけではないので、上記の諸例がどこまで一般化できるか心もとない部分もあるが、集落内におけるあり方を改めて整理し、梅田萱峯遺跡の方形土坑の位置づ

けを行ってみる。

弥生時代中期後葉のうち梅田萱峯遺跡のⅣ－1期と退休寺遺跡(Ⅳ－2からⅣ－3期)では、方形土坑の型式も未分化で、位置関係から居住単位との結びつきを強く窺わせる。退休寺遺跡で多く見られた壁溝もピットもないⅡ－３類は、埋土中から比較的多数の土器が出土しているので廃棄土坑であったのではないかと思われるが、Ⅰ－２類である梅田萱峯遺跡SK6は、底面から出土した炭化物層にアワやササゲ属の種子のほか棒状の炭化材が含まれていたことから、上屋構造を持つ貯蔵施設であった可能性もある。

退休寺遺跡例がある一方、Ⅳ－2からⅣ－3期は梅田萱峯遺跡や笠見第3遺跡の例から新たな展開が見られる。両遺跡とも居住単位の周縁に方形土坑が配置されるようになるほか、主柱穴を持つⅠ－１類が出現し、この方形土坑がまとまって築かれる。こうしたあり方は、方形土坑が居住単位との結びつきを離れて集落を構成する集団の管理下におかれたと考えたい。こうした背景には笠見第3遺跡では地域間交流の存在やわずかではあるが良質の鉄器を保有しえた集落の確立が指摘されている。梅田萱峯遺跡の場合は墳丘墓の築造を考えずにはおれない。墳丘墓に近接した北側付近には分銅形土製品を持つ大型住居が建て続けられており、墳丘墓との土器の接合は両者の緊密な関係を示すし、同時期性の立証が困難であるとはいえ、独立棟持柱を有する建物の存在も示唆的である。Ⅰ－１類を中心とした方形土坑の集中部も墳丘墓の中心軸線上に位置すると理解でき、そのひとつであるSK121から出土した絵画土器(第65図)は、絵画土器を伴う稀有な例である本墳丘墓での墳墓祭祀に重要な役割を果たした可能性がある。また墳丘墓南東に位置するSK91から出土した分銅形土製品も、東尾根一帯から出土した他の分銅形土製品とともに墳墓祭祀の一員を担っていたのではないだろうか。こうしてみるとⅠ－１類を中心とした梅田萱峯遺跡の方形土坑は、すべてとまではいえないものの墳墓祭祀との関わりを持ち、そうした場面で使われた品々の保管や最終的な廃棄の場として使われた可能性を考えたい。梅田萱峯遺跡の場合は例外的に祭祀に特化したとも考えられるが、笠見第3遺跡D区SK14で示されたⅠ－１類方形土坑と「共同炊爨」行為との関係も、祭祀的な側面を表している。

弥生時代後期後葉(Ⅴ－3期)の方形土坑は、笠見第3遺跡を見る限り、主柱穴を持つⅠ－１類を１基ずつ配し、その他の方形土坑とセットでいくつかの地点にまとめ置かれたか、Ⅳ－2からⅣ－3期のあり方が整理集約され、居住単位を含めた形で尾根上にいくつも現れたか、現時点では明らかにしえない。

上種第5遺跡例は複数のⅠ－１類が特定の住居に伴っていた点で注目される。この場合、住居の規模が超大型であるため、集団内での格差が現れた結果、方形土坑が個人に帰属したと考えたくなる。ただこの建物があまりにも大きいため個人の住居であったか、集団が共同使用するような建物であったか判断しかねる。後者の可能性も大いにあり得ることで、その場合、方形土坑は引き続き集落を構成する集団の管理下であったと思われる。

以上、方形土坑を分類し、集落における配置状況などからその性格を考えてみた。その結果、方形土坑はいくつかの型式に分類され、上屋構造を持つものがあることが分かった。またもともとは居住単位に属していたものが、集落全体の管理下に置かれ、特にⅠ－１類としたものは集落内で集中的に配置され、祭祀的な機能を持つ場合が認められた。

梅田萱峯遺跡の方形土坑も、Ⅳ－2からⅣ－3期において主柱穴を伴うⅠ－１類が出現し、それに伴い集落全体で管理される施設となった。これは墳丘墓の築造に伴う動きと考えられ、墳丘墓が築かれ

た東尾根は、竪穴住居など建物のあり方や出土遺物から、墳墓祭祀の執り行われた空間と位置づけられ、そこに集中して設けられたⅠ－１類を典型例とする方形土坑は特に墳墓祭祀と密接なつながりを有すると考えた。

方形土坑については、すべての類例を調べたわけではないので、誤った解釈をしているところがあるのではないかと危惧する。ここで方形土坑としたものには、構造や機能から別種のものを含んでいる可能性もあり、「方形土坑」という名称の妥当性とともに、今後の検討課題としたい。

今回の調査地の南側隣接地は、今後発掘調査が予定されている。また墳丘墓についても調査が続行される見通しである。新たな発見により、梅田萱峯遺跡の弥生時代像がより明らかとなるであろう。

（湯村）

（註１）竪穴住居の周堤幅を考慮し、壁面の距離が４～６ｍ以上離れていなければ同時並存とみなしがたいとする高田健一氏の見解に従う。
高田健一 2002「妻木晩田遺跡における弥生時代集落像の復元」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2002』鳥取県教育委員会

（註２）註１前掲文献に依拠した。

（註３）床面積から見た建物規模の分類は、下記に依拠した。
牧本哲雄 2004「笠見第３遺跡の集落変遷と建物配列パターンから見た集落構造の復元」『笠見第３遺跡』（財）鳥取県教育文化財団

（註４）古墳時代前期の例として、上伊勢第１遺跡（琴浦町）の方形土坑１～５がある。
玉木秀幸・淺田康行・前島ちか編 2005『上伊勢第１遺跡　三保第１遺跡』（財）鳥取県教育文化財団

（註５）Ⅰ－１類は土坑の短軸方向の壁面中央に、おおむね 30cm を超える深さのピットを２個一対有するものである（例外的なｂ類の一例を除く）。このピットは笠見第３遺跡Ｄ区 SK14 で柱痕跡が確認され、また後述するように上屋構造を支える柱が立っていたと考えられるもので、これを主柱穴と呼ぶ。

（註６）方形土坑は住居、土坑、貯蔵穴などと報告されている。以下に述べる各遺跡で方形土坑としたものは次のとおりである。
退休寺遺跡　SI-02、SI-05、SK-06、SK-07、SK-09、SK-10
笠見第３遺跡（Ⅳ－３期）　SI55、SI99、SI125、SK1、SK65、SK100、SK119、Ｄ区 SK9、Ｄ区 SK14、Ｄ区 SK35
笠見第３遺跡（Ⅴ－３期）　SI57、SI65、SI76、SI84、Ｄ区 SI2、Ｄ区 SI4
上種第５遺跡　貯蔵穴１～８

（註７）笠見第３遺跡のⅤ－３期は住居ブロックの再編期とされている。
高尾浩司 2007「笠見第３遺跡における弥生～古墳時代集落の変遷と構造」『笠見第３遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター、及び註３前掲文献

参考文献

牧本哲雄編 2004『笠見第３遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
高尾浩司・大川泰広編 2007『笠見第３遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター
中原　斉編 1992『越敷山遺跡群』会見町教育委員会・岸本町教育委員会
西尾秀道ほか編 2005『退休寺遺跡　退休寺飛渡り遺跡』中山町教育委員会
馬潤義則・根鈴智津子編 1985『上種第５遺跡発掘調査報告 』大栄町教育委員会